

長野県松本市

HAYASHI YAMAKOSHI

林山腰遺跡Ⅱ

— 発掘調査報告書 —



2004.3

松本市教育委員会

長野県松本市

HAYASHI YAMAKOSHI

林山腰遺跡Ⅱ

— 発掘調査報告書 —



2004.3

松本市教育委員会

例言

- 1 本書は、平成14年5月23日から平成15年2月15日にかけて実施した、長野県松本市大字里山辺5027-1ほかに所在する林山腰遺跡の第2次発掘調査報告書である。
- 2 本調査は県営中山間地域総合整備事業山辺地区、大嵩崎ほ場整備工事に先立って松本市教育委員会が実施した確認調査と発掘調査である。
- 3 本書の執筆分担は次のとおり
第1章：事務局、第2章第2節3：小松芳郎、第3章第2節3(1)：竹原 学、その他：澤柳秀利・直井雅尚
- 4 本書の作成にあたって作業分担は次のとおり
遺物洗浄、遺物接合・保存処理：五十嵐周子、内澤紀代子、百瀬二三子
土器・陶磁器実測・トレース、金属製品拓影：白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、洞沢文江
遺構図整理・トレース：石合英子、澤柳秀利、村山牧枝
写真撮影：中村慎吾(現場)、宮嶋洋一(遺物)
編集・総括：澤柳秀利、直井雅尚
- 5 本文と図・表中で遺構等の名称を略号で示す場合、以下のとおりとし、遺構番号は略号の前または後に数字を付して表記した。
トレンチ→T、建物址→建、石列→石、土坑→土、半地下工場跡→工、礎石→礎、溝址→溝
- 6 図類の縮尺は、遺構は1:60、1:80、1:120、土器陶磁器は1:4、銭貨は1:1.5を基本としたが異なっているものもあり、すべてに縮尺を付した。
- 7 土器・陶磁器の実測図は、断面が白抜きは土器・土製品、黒塗りは陶磁器を示している。
- 8 本書の執筆にあたり参考とした文献は次のとおりである。
文献1 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2
文献2 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の年代と分類」『貿易陶磁研究』2
文献3 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2
文献4 藤沢良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館
文献5 市川隆之 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』9
文献6 松本市教育委員会 1988『松本市林山腰遺跡』
文献7 松本市 1992『松本市における戦時下軍事工場の外国人労働者実態調査報告書』
- 9 文献7の名称については、本文や図中で「労働実態調査報告書」または「実態調査報告書」と略記した。
- 10 発掘調査と本書の作成にあたり、次の方々から指導・助言をいただいた。記して感謝申しあげる。
河西克造、小松芳郎、佐々木隆一郎、笹本正治、竹原 学、中川治雄、平林 彰、田島ルーフィング(株)、アスファルトルーフィング工業会、中部電力(株)松本営業所
- 10 出土遺物・図面・写真類は、松本市教育委員会が所有し、松本市立考古博物館(〒390-0823 長野県松本市大字中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)が保管している。

目次

例言	1
目次・図目次	2
第1章 調査の経緯	
1 調査に至る経過	3
2 調査体制	3
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の立地と自然環境	4
第2節 歴史的環境	
1 中世以前	4
2 中世から近世	6
3 近代から戦後、現代	7
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	11
第2節 中世の遺構・遺物	
1 A～D区の遺構	20
2 E区の遺構	21
3 遺物	24
第3節 近代の遺構・遺物	
1 調査の進め方	36
2 遺構	36
3 遺物	39
第4章 調査のまとめ	45
写真図版	47
抄録	

図目次

第1図 遺跡の範囲と周辺遺跡	5	第13図 林山腰遺跡 E区全体図	28
第2図 労働実態調査報告書 図1転載	10	第14図 E区建物址2・3、土坑3・4・6・7	29
第3図 林山腰遺跡第2次調査 範囲図	12	第15図 E区建物址4・5、土坑1・5、溝1・2、石列2	30
第4図 林山腰遺跡第2次調査 区割全体図	13	第16図 E区石列3～5	31
第5図 調査地区割図①	14	第17図 中世の土器・陶磁器(1)	32
第6図 調査地区割図②	15	第18図 中世の土器・陶磁器(2)	33
第7図 調査地区割図③④	16	第19図 銭貨	33
第8図 調査地区割図⑤	17	第20図 労働実態調査報告書 図3転載	41
第9図 調査地区割図⑥⑦	18	第21図 半地下工場計画位置と現況地形・調査範囲	42
第10図 調査地区割図⑧	19	第22図 第1号半地下工場跡	43
第11図 林山腰遺跡 C区全体図	26	第23図 5・6・8～10号半地下工場跡現況地形測量図	44
第12図 C区建物址1、E区石列1・縁石列	27		

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

松本市大字里山辺5027-1外に、長野県松本地方事務所による県営中山間地域総合整備の一環として大嵩崎地区ほ場整備事業が計画された。しかし、計画範囲には周知の埋蔵文化財包蔵地である林山腰遺跡の一部が含まれており、また一帯には第2次世界大戦中の軍事工場跡である里山辺地区半地下工場跡(以下「半地下工場」という。)の推定地が展開していた。

松本市教育委員会(以下「市教委」という。)は当該文化財の現況を探る目的で、平成13年11月16日から同月20日にかけて事業予定地全域での試掘調査を実施した。その結果9カ所のトレンチから中世に関連する遺物の出土があったほか、残されている半地下工場の計画図等に合致すると思われる遺構の痕跡が認められた。そのため市教委は、事業者である松本地方事務所、薄川土地改良区と協議を行い、事業に先立って確認調査を実施し当該文化財の保護方法を探るとともに、必要に応じて記録保存を行うこととした。ただし半地下工場は近代遺構(戦争遺跡)として位置付けられるもので、周知の埋蔵文化財包蔵地とは扱いが異なることから、これを含むすべての調査は市教委の単独事業として取り組むこととした。

発掘調査は平成14年5月から翌年2月にかけて実施した。終了後、平成15年2月15日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出、また同日付で埋蔵物発見届を松本警察署に提出、同年4月22日付で県教委から埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。整理作業及び調査報告書の刊行は平成15年度に行った。

2 調査体制

【平成14年度】(発掘調査)

調査団長：竹淵公章(松本市教育長)

調査担当者：澤柳秀利(文化課主任)、中村慎吾(同嘱託)

調査指導者：小松芳郎(松本市文書館長)

調査員：今村 克(考古学)、森 義直(地形・地質)

発掘調査協力者

荒井留美子、飯島由次、飯田三男、池田 勝、石井脩二、入山正男、岩崎百合子、大月八十喜、久保田登子、小松正子、小山貴広、清水陽子、鈴木幸子、鷲見昇司、寺島 実、兎川國明、中上昇一、中村恵子、中村安雄、福沢佳典、藤井弥三郎、布野行雄、布野和嘉夫、待井敏夫、御園 実、道浦久美子、宮田美智子、山崎照友、横山 清、米山禎興

事務局：松本市教育委員会教育部文化課

有賀一誠(課長)、熊谷康治(課長補佐)、田口博敏(同)、直井雅尚(主査)、武井義正(主任～H15.3)、

栗田幸信(主任)、久保田剛(同)、櫻井 了(主事)、渡邊陽子(嘱託)、塚原祐一(同～H15.3)、太田万喜子(同)

【平成15年度】(整理作業、報告書刊行)

調査担当者：澤柳秀利

調査指導者：小松芳郎(松本市文書館長)、竹原 学(松本市立博物館学芸員)

調査員：宮嶋洋一

事務局：松本市教育委員会教育部文化課

有賀一誠(課長)、熊谷康治(課長補佐)、田口博敏(同)、直井雅尚(主査)、栗田幸信(主任)、久保田剛(同)、櫻井 了(同)、渡邊陽子(嘱託)、太田万喜子(同)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と自然環境

1 位置と地形

本遺跡は、松本市里山辺林地区の東部から大嵩崎集落の北西部の山脚と谷沿いにかけて、北西から南東に細長く伸びる形で位置している。一帯の小字は「山腰」と「山コシ」である。松本市街を西流する薄川の中流域にかかる金華橋から遺跡の北西端まではわずか200mの近接地(左岸)にある。

遺跡の北西部一帯は薄川扇状地の氾濫原で、西ないし南西へ傾く地形面を形成している。遺跡の載る地形面は長さ約250m、傾斜30/1000の斜面である。東部の林城山(県史跡小笠原氏城跡群の林大城)の先端(北西)の南西側の山脚に沿っているので、薄川や薄川扇状地から遮蔽された形となっている。そのため林城山の山麓面(崖錐)のようにも見える。一方、遺跡の南東部は林城山の南西側の傾斜度の高い長さ800mほどの大嵩崎の谷(平均傾斜104/1000)にかかり、北西に下ってくる。この遺跡南東部の地形面(方向～北西)と北西部の地形面(方向～南ないし南東)は谷口で接し、東西性の縫合帯と低湿地をつくっている。第1次調査(昭和62年度実施)のⅢ区はこの低湿地に接しているため、湧水がみられた。この低湿地は、大嵩崎の谷を下った流れと合し、林集落の南の山脚を、小流と低湿帯をつくって西流している。林集落の氾濫原はこの低湿地へ向い南西の傾斜面(傾斜26/1000・方向南～南西～西)を作っている。以上の地形面の傾斜方向、傾斜度や東西性の低湿帯からみると、遺跡北西部の載る地形面は、明らかに薄川扇状地(氾濫原)に属するものであることが理解される。また遺跡南東部は大嵩崎の谷に発達した林城山からの崖錐地形にあたっている。この山麓面(崖錐)は谷口までで終り、それより北西の地形面に及んでいない。山脚に山麓面を探しても、幅5m前後に過ぎない。それだけ山腹山脚が急峻であるともいえる。これらの観察から、薄川の氾濫は、林城山の先端に妨げられ、その陰が生れ、遺跡北西部の地形面の南ないし南東方向を作ったものと考えられる。山腹山脚が急峻で山麓面を欠くことについての構造的運動の存否ははっきりしていない。

2 遺跡の堆積層

遺跡北西部の載る地形面が薄川の扇状地の堆積層であることは、第1次調査地の地層やそこに含まれた礫・礫層によって示されている。堆積あるいは土層中に含まれる礫は、形は円礫か垂円礫で、明らかに河床礫である。礫の種類は多い方から安山岩、石英閃緑岩、緑色火山岩、礫岩である。これらの礫は薄川起源のものである。土層は扇状地(氾濫原)末端の堆積の状態、砂質であるが顕著な礫層や大・中礫を含まない。これに対して今回の主要な調査地である遺跡南東部は崖錐地形にあたるため、土層には隣接的林城山の岩石である第三期層内村累層の泥岩・砂岩が大量に混じっている。

第2節 歴史的環境

1 中世以前

本遺跡の一帯では旧石器時代の遺跡・遺物の発見はない。縄文時代になると本遺跡をはじめ石上遺跡、堀の内遺跡など東山山麓での遺跡数は多く、本遺跡の第1次調査では縄文時代後期の柄鏡型敷石住居が発見されている。

弥生時代には針塚遺跡や鎌田遺跡などで前期末～中期の遺構・遺物が発見されている。針塚遺跡では弥生時代前期末の再葬墓群が検出されており、この地域に弥生文化が波及した頃の遺跡として知られている。薄川下流右岸の県町遺跡では12次にわたる調査が行われ、中期末から古墳時代、奈良・平安時代に続く大規模な集落が確認されている。



- 196: 荒町遺跡 199: 堀の内遺跡 200: 兎川寺遺跡 201: 針塚遺跡 203: 上金井遺跡 205: 里山辺鎌田遺跡 206: 薄町遺跡
 207: 石上遺跡 208: 林山腰遺跡 209: 千鹿頭北遺跡 210: 御符遺跡 211: 大嵩崎遺跡 212: わび沢遺跡 213: 林遺跡
 223: 大塚1号古墳 224: 大塚2号古墳 225: 針塚古墳 226: 古宮古墳 227: 里山辺猫塚古墳 228: 石上古墳 229: 上金井古墳
 230: 御符古墳 233: 林城址 (a: 大城 b: 小城) 487: 北小松遺跡
 (※アミ範囲は今回の調査地を示す)

第1図 遺跡の範囲と周辺遺跡

古墳時代には薄川の扇状地上に多くの古墳が築かれる。多くは開発により煙滅してしまったが、平成元年に調査された薄川右岸の針塚古墳や同左岸の南方古墳からは供献土器や副葬品が多量に出土し、被葬者はこの一帯の開発に関わった人物と想像される。針塚古墳は復元整備され、現在は長野県史跡に指定されている。千鹿頭池北側に広がる千鹿頭北遺跡では古墳時代前期から後期にかけての住居址群が確認され、この地域での大規模な集落址として知られている。

奈良・平安時代になると松本市域での遺跡数は増加し、この地域においても同様の傾向を示す。兎川寺遺跡をはじめ千鹿頭北遺跡などで多くの集落跡が調査されている。特に県町遺跡では多数の緑釉陶器や緑彩文陶、水晶製銚帯などが出土し、官衙との関連を想起させる。本遺跡の第1次調査においても平安時代の住居址を確認している。

2 中世から近世

本遺跡を含む旧筑摩郡一帯では、中世以降の考古学的な調査成果は前代までに比べて急減し、遺構・遺物から歴史を解明する試みが十分になされているとは言い難い。また鎌倉時代は文献資料も少なく、今後の考古学、歴史学研究の課題といえる。

室町時代になると文献資料によって、ある程度歴史の流れが追えるようになるが、松本平の室町時代については信濃守護小笠原氏を抜きにして語ることはできない。建武政権から小笠原貞宗が信濃守護に任じられて以降、南北朝の動乱期やそれ以後も勢力を維持して、その一族は最も多く信濃守護を務めた。小笠原長秀は応永7年(1400)に入部した際に、東北信の村上氏を中心とする国人の一揆(大文字一揆)と戦って敗れ、守護の地位を失った(大塔合戦)。その後も信濃一國、特に北信地方では小笠原氏による支配が浸透しないという状況が続く。後に長秀の弟政康が信濃守護に任命されるが、その後の小笠原氏は分裂へ向かうことになる。文安3年(1446)に政康の甥持長が信濃守護職を巡って政康の子宗康と争い、これを敗死させる。持長は井川館を居館としていたとされ、これが府中小笠原氏(深志小笠原氏)となる。守護職は宗康の死後、弟の光康(松尾小笠原氏)が任じられるが、一時、持長が守護になっていたこともある。その後、府中と松尾の対立は激化し、宗康の子政秀(鈴岡小笠原氏)は持長の子清宗(宗清)と争い、府中へも攻め込んだ。このころ府中小笠原氏は林の館を築いたとされる。政秀は文明12年(1480)に光康の子家長を攻め、長享3年(1489)には再度、府中を攻めて支配下に置くが、家長の子定基らとの抗争によって鈴岡小笠原氏は滅亡へと向かった。天文3年(1534)に清宗の曾孫である長棟は伊那に攻め込み、定基の子貞忠は武田氏に付くこととなった。これによって信濃の小笠原氏は府中小笠原氏に統一された。

その後の小笠原氏は戦国大名としての性格を強め、筑摩・安曇の2郡を実質的な支配領域としたが、東北信は村上氏、高梨氏等の国人領主が支配し、また南信では諏訪氏が甲斐の武田氏と和睦して勢力を保っていた。天文11年(1542)には諏訪地方は武田氏(武田晴信)の侵攻を受け、その支配下に置かれた。武田氏はさらに信濃南部にも勢力を伸張し、小笠原氏は伊那の藤澤氏に援軍を送って武田氏と対峙した。天文17年(1548)、小笠原氏は武田氏の領国となっていた諏訪に乱入したが失敗に終わり、次いで行われた塩尻峠の戦いでも小笠原氏は破れた。それにより武田氏は松本盆地に侵入、村井城(松本市芳川)を築いて府中侵攻の足がかりとした。小笠原氏(小笠原長時)は没落し、天文19年(1550)には林城が自落して信濃国のうち中南信地方は武田氏の支配下におかれるようになった。長時は諸国を遍歴し、子貞慶による深志城回復後、会津黒川城下で死去し、信濃に戻ることはなかった。武田氏は小笠原氏の旧領筑摩・安曇両郡を支配するにあたって、拠点和平城である深志城(現松本城)に移し、修築して使用した。

天正10年(1582)6月、本能寺の変が勃発すると信濃国もその余波を受け混乱する。同年3月の武田氏滅亡後、深志城は織田の家臣となっていた木曾氏が治めていたが、その混乱に乗じ、上杉氏の支援を受けた小笠原貞種(洞雪)が奪ったとされる。さらに徳川氏の支援を受けた小笠原長時の子貞慶が入城して、深志から現在の松本に名を改めるとともに旧地奪回を進めた。その後、小笠原氏は越後の上杉氏と対立し、筑北などでは

上杉方との戦いもあった。このような天正10年から13年にかけての軍事的な緊張状況の中で、貞慶は林城等の山城を大規模に改修して戦乱に備えた可能性がある。現在残るこれらの山城の多くには、在地の石垣技術や当時の最新の縄張が採用されており、時代背景を推測することができる。

江戸時代になると、松本藩の中心地は松本城及びその城下となった。郊外の林城をはじめとした山辺谷などの山城は使用されなくなり、小笠原氏のかつての本拠地であった林・大嵩崎谷も耕地化されていったものと思われる。多くの寺院は松本城下町に移転し、浄林寺(伊勢町)など一部の寺院は現在も存続している。林にあった慈眼寺は江戸時代末まで存続したが、明治初年の廃仏毀釈によって廃寺となり、現在では旧境内地を挟んだ辻に小堂が残存するのみとなっている。

3 近代から戦後、現代

(1) 戦時下の軍事工場の建設

松本市が調査してまとめた『松本市における戦時下軍事工場の外国人労働実態調査報告書』(平成4年3月発行、同年7月二刷、以下『労働実態調査報告書』)は、①これまで発表された文献の調査、②当時の関係資料調査、③現地調査、④当時の関係者への聞き取り調査、によってまとめられている。この報告書によると、戦時下のこの地域、とくに里山辺地区における軍事工場の建設は、つぎのような経過と背景をもつものであった。

第2次世界大戦時における松本市域の軍用機製作の軍事工場である地下・半地下工場は、三菱重工業株式会社(名古屋)の航空機工場の疎開として計画され、建設されたものであり、三菱の第一製作所が直接の管轄主体であった。まず、松本市域の既存工場へ疎開し、さらに、再疎開という方針によって山間地帯に工場建設が計画され、実施された。

軍事工場の疎開は、国(軍)の方針にそったものであり、「航空本部」が設置されて、全体の建設工事を管轄した。「航空本部」は、陸軍に属していた。

地下・半地下工場の建設は、陸軍の航空本部の管轄のもとに、株式会社熊谷組が請け負い、神林地区から里山辺地区に移された同組の松本作業所が管轄した。株式会社熊谷組の一員として、朝鮮人労働者も工事に従事した。

軍事工場は、既存の工場や各種建物への疎開のほかに、当時の東筑摩郡里山辺村・入山辺村・中山村などにおいて、地下工場と半地下工場の建設がおこなわれた。

里山辺地区では、地下工場と半地下工場の建設がおこなわれた。里山辺地区の地下工場の建設は、向山・林城山の2カ所であった。地下工場は、格子状に建設される計画であり、地下壕が貫通していた部分もあり、ある程度まで工事がすすめられていた。地下工場跡は、現在でも1カ所がのこっており、そのほかの出入口跡もいくつか確認された。半地下工場については、昭和23年に撮影された航空写真から、その跡地を推定でき、また、そのうちのいくつかは場所の確定がなされた。

里山辺地区では、地下工場・半地下工場の建設に、陸軍、三菱重工業株式会社、株式会社熊谷組、技術系の大学・専門学校の学生、勤労働員による松本市周辺や県内の人びと、県外の職人集団(組)、朝鮮人が動員された。里山辺の人びとは、この工場建設の労働には直接はたずさわっていない。工場建設の現場での労働にたずさわった人びとはほとんどが男性で、朝鮮人もふくめて女性はごくわずかしかなかった。事務所や飯場では女性が従事している例がある。工場建設の労働にたずさわっていた人びとは、里山辺地区内の公共建物、寺社、民家や「飯場」(共同宿泊施設)に宿泊していた。

里山辺地区には東海第555部隊が約850人駐屯していた。実際の任務ははっきりしないが、聞き取り調査では半地下工場の建設に従事していたと考えられる。

外国人労働という面からみると、工事に動員された里山辺地区での朝鮮人は、家族で里山辺地区内の民家に宿泊していた人びとと、「飯場」に宿泊していた人びとがあった。里山辺地区においては朝鮮人と地元の人びとの交流がある程度あり、宿泊先の日常生活における相互扶助もみられた。工事に従事した朝鮮人は、県外各

地のほか陸軍飛行場の工事現場や下伊那の発電所工事現場などから移動してきている例がみられる。また、それらの地へ移動している例もみられる。請け負い主体である熊谷組の管轄下で移動がおこなわれたと考えられる。

朝鮮人は、日本人と同様に配給制度のもとにあり、株式会社熊谷組から賃金をある程度支給されており、労働が特別の監視体制やきびしい管理下のもとでおこなわれていたということについては、確証がえられなかった。ただ、朝鮮人が、里山辺地区において、地下工場の建設というとくに危険をともなう場所で昼夜2交替の労働に従事させられていた。

地下・半地下工場の建設に従事した人数は、諸記録やいくつかの証言から里山辺地区で延べにして約7,000人と推定される。この人数は、朝鮮人だけでなく日本人もふくまれる。また、この人数は延べ人数であり、いちどにこれだけの人数が工事にたずさわっていたわけではない。

地下・半地下工場は、昭和20年2月から計画され、実際に工事が開始されたのは4月以降である。工事の終了は昭和20年8月15日であり、約5カ月にわたって実施された。

地下・半地下工場の建設は、ほとんど完成しない段階で敗戦をむかえた。そのため、当初の目的である航空機の部品製造の操業にまではいたらなかった。

(2) 米国の調査にみる半地下工場

『米国戦略爆撃調査団調査報告書』(全108巻)の第15巻から第35巻までに日本の航空機産業がとりあげられている。米軍の空襲にともなう各航空機会社の疎開・地下移転の状況が、調査団の終戦直後の日本での現地調査に基づいて詳細に記述されている。

米国戦略爆撃調査団は、故ルーズベルト大統領の指令に基づき、1944年11月3日に、陸軍長官によって設置されたものである。そして、1945年8月15日、トルーマン大統領は調査団に対し、対日戦争における、あらゆる種類の空襲の効果を同様に研究し、正副2通の報告書をそれぞれ陸海軍長官に提出するように要請した。調査団は、多くの日本人関係者に証言を求め、多くの文書を接收して調査をすすめた。

この報告書にある「DISPERSAL MAP」(分散地図)は、松本区域における工場疎開の様子をよく示している(第2図)。「MATSUMOTO AREA」(松本地帯)、「MURAI AREA」(村井地帯)、「MOUNTAIN AREA」(山間地帯)の三つが表記されているが、「村井地帯」は、陸軍の飛行場がある場所で、組み立てられた飛行機をここから離陸させる予定であったと考えられるが、「松本地帯」と「山間地帯」が、名古屋から疎開してきた軍事工場の疎開場所であった。はじめに工場疎開地として計画されたのが、「松本地区」で、昭和20年2月にすでに工場関係者が、松本にはいつてきている。

このエリア内に表記されている1は、米軍の報告書によれば、本部で日本蚕糸松本工場を転用しようとしたものである。2以下が工場で、2は日本蚕糸普及団、3が女子職業学校(現、松南高等学校)、4が松本第2中学(現、松本県ヶ丘高等学校)、5が松本高等学校(現、あがたの森公園)、というように、既存の工場や学校の建物に航空機製造工場を疎開させる計画であったことがわかる。

「山間地帯」は、「松本地帯」からの工場の再疎開の場所であった。この地への再疎開は、昭和20年4月からである。既存の工場や学校の建物が集中していないこの地には、地下・半地下工場の建設がまず計画され実行された。熊谷組がその建設工事を請け負った。そして、地下・半地下工場が完成した後は、名古屋三菱のもとで航空機製造が開始される計画であった。「山間地帯」に「JYO-YAMA」「MUKOYAMA」とあるが、城山(林城山)と向山に地下工場が描かれている。そのほか、山辺・中山地区の楕円形の図は半地下工場を示している。

今回の発掘地点は、図では1、5、12、13の番号が付された半地下工場一帯である。『米国戦略爆撃調査団調査報告書』によれば、半地下工場の1は、「松本地帯」1(「本部」)のうち「部品作業所(機械製造)木工所」を疎開する予定になっている。5は、「松本地帯」6(「工業工場」)の松本工業学校(現、松本工業高等学校)の「資材部」を疎開させ、「山間地帯」の12、13は、「松本地帯」9(「清水工場」)の清水国民学校(現、清水小学校)の

「生産統制部」を疎開させる予定であった。

(3) 写真にみる里山辺の林地区の半地下工場

当時、半地下工場屋根の設計に携わっていた池田三四郎氏(故人)は、林地区の半地下工場の写真を撮影している。ここに示した写真は、いずれも昭和20年7月に撮影されたものである。1枚には、ほぼ完成した3棟の半地下工場が写っている。周辺の土地や山が鬱蒼としているのに反して、工場のまわりは地肌が剥き出しになっている。池田氏の写真を添付したノートには「林地区」と書かれており、林地区から大嵩崎方面にむかって撮影したものである(写真1「林地区の半地下工場」)。

もう1枚の写真は、ノートには「林地区における半地下及通風明り取り窓の構造」と記されている(写真2「半地下工場の窓」)。2枚の写真に写っている半地下工場は、いずれも屋根の上に、この「通風明り取り窓」がいくつも閉じた状態で取り付けられているのがわかる。

(4) 戦後のうごき

地下・半地下工場は、戦後、多くの人びとの手によって資材が運び出されるなどして、破壊され、地下工場は出入口のほとんどがくずれて、そのままとなっている。すてられた土砂は一部が利用されたが、そのほとんどがそのままとなっている。半地下工場は、もとの田畑に復元された。

里山辺地区、中山地区、陸軍の飛行場と、すべての場所で、田畑と私有林が工場や飛行場の建設のために強制的に没収された。戦後になって、その土地の補償をめぐる交渉がおこなわれ、解決がはかられている。



写真1
林地区の半地下工場



写真2
半地下工場の窓

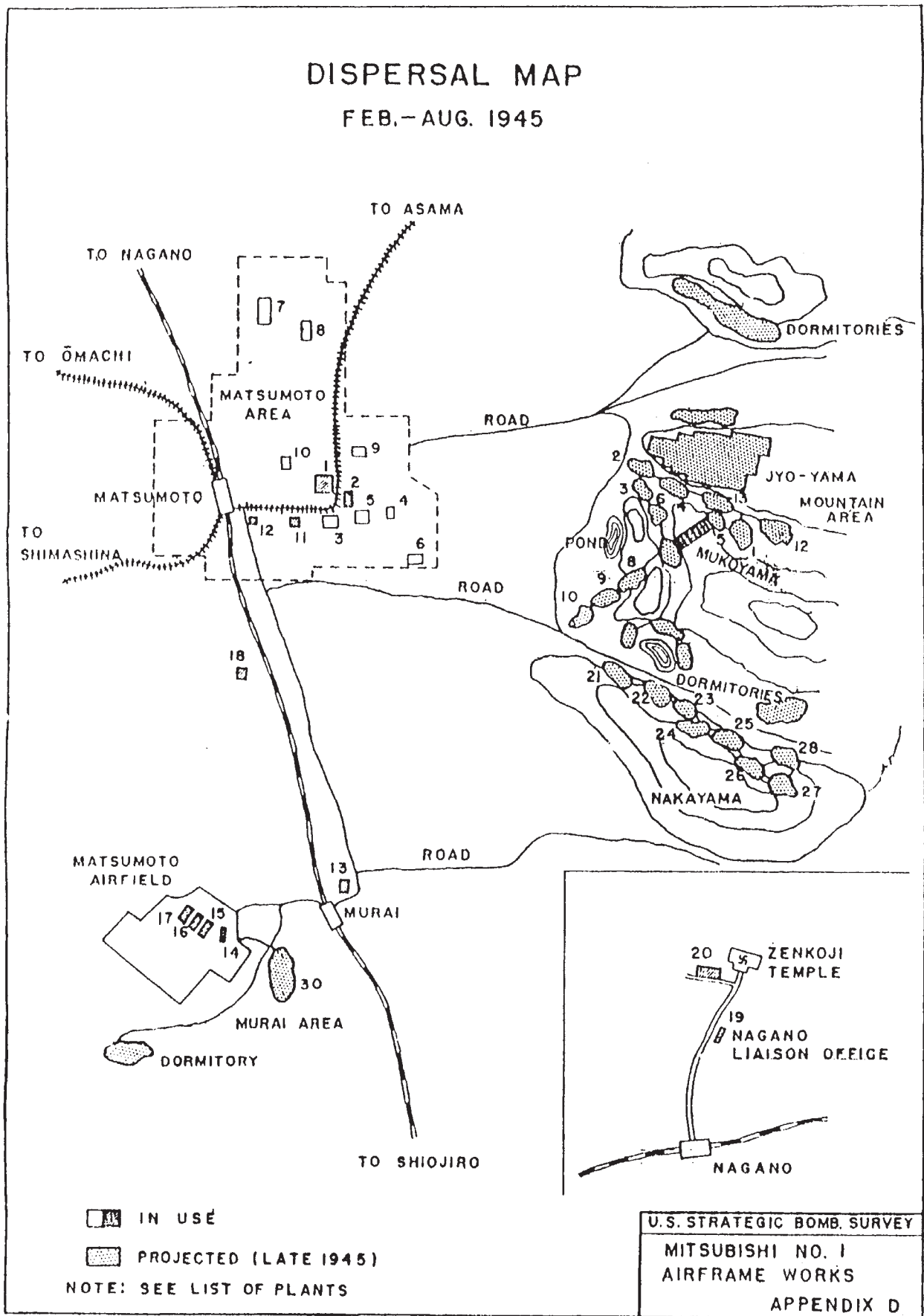


図1 『米軍戦略爆撃調査団調査報告書』 DISPERSAL MAP (分散地図) にみる軍事工場の疎開

第2図 『労働実態調査報告書』 112頁 図1 転載

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

1 調査の方法

調査地は県史跡「小笠原氏城跡群」のうち林大城(林城山)と林小城に挟まれた谷状の地形に位置しているが、これまでは一帯での中世遺構等の存在は考古学的な調査では確認されていなかった。一方、近代の遺構である半地下工場跡の存在は当時の文献等から知られていた。このため今回の調査は、本来の林山腰遺跡に関わる原始古代、中世にかけての遺構・遺物の確認及び発掘と半地下工場跡の確認を並行して進めることとなった。

開発区域内の全域に37本のトレンチを設定して掘り下げを進めたところ、その多くから中世と近代の遺構・遺物が確認された。開発地は広範囲に及んだので、現況地形に応じてA～Eの5カ所の地区を設定して発掘作業を進めた。A～D区は主にトレンチ調査と部分的な拡張を行い、E区はトレンチ調査等で全体的に遺構の存在が想定されたため、全面調査を実施した。

2 各地区の設定状況等

(1) A区(区割図:第10図)

A区は開発区域北端部に位置し、1～3工及びその後背地の平坦面にあたる。東西60m、南北50mのほぼ方形の区画である。北及び西側は一段低く、石垣をもって接する。東側は林城南西麓の緩斜面、南側は一段高いC区と土手をもって接している。この地区は大きく東西の2段に分かれる。西側は1～3工が造成された場所で、削平を受けているとみられる。東側の現況は水田とブドウ園であった。

(2) B区(区割図:第8図)

開発区域中央部、9工と6工の間にある棚田状の水田面である。中世遺構の確認調査のため2本のトレンチを設定したところ、土師質土器皿などの中世の遺物が出土した。そのため一部を面的に広げた。

(3) C区(区割図:第8・9図)

開発区域中央北、A区の南側にあたる。1辺が40m前後の不整形を呈する平坦地で、北側は土手をもって一段低いA区と接する。西側は緩斜面で一段低い平坦面と接する。東及び南側は屏風状の土手をもって上段の自然傾斜面に接している。現況は水田とブドウ園であった。

(4) D区(区割図:第8図)

開発区域中央部、6工のある水田面及びその西側平坦面である。南側は一段高いB区と土手をもって接している。7工の掘り込まれる面と同一面である。

(5) E区(区割図:第5図)

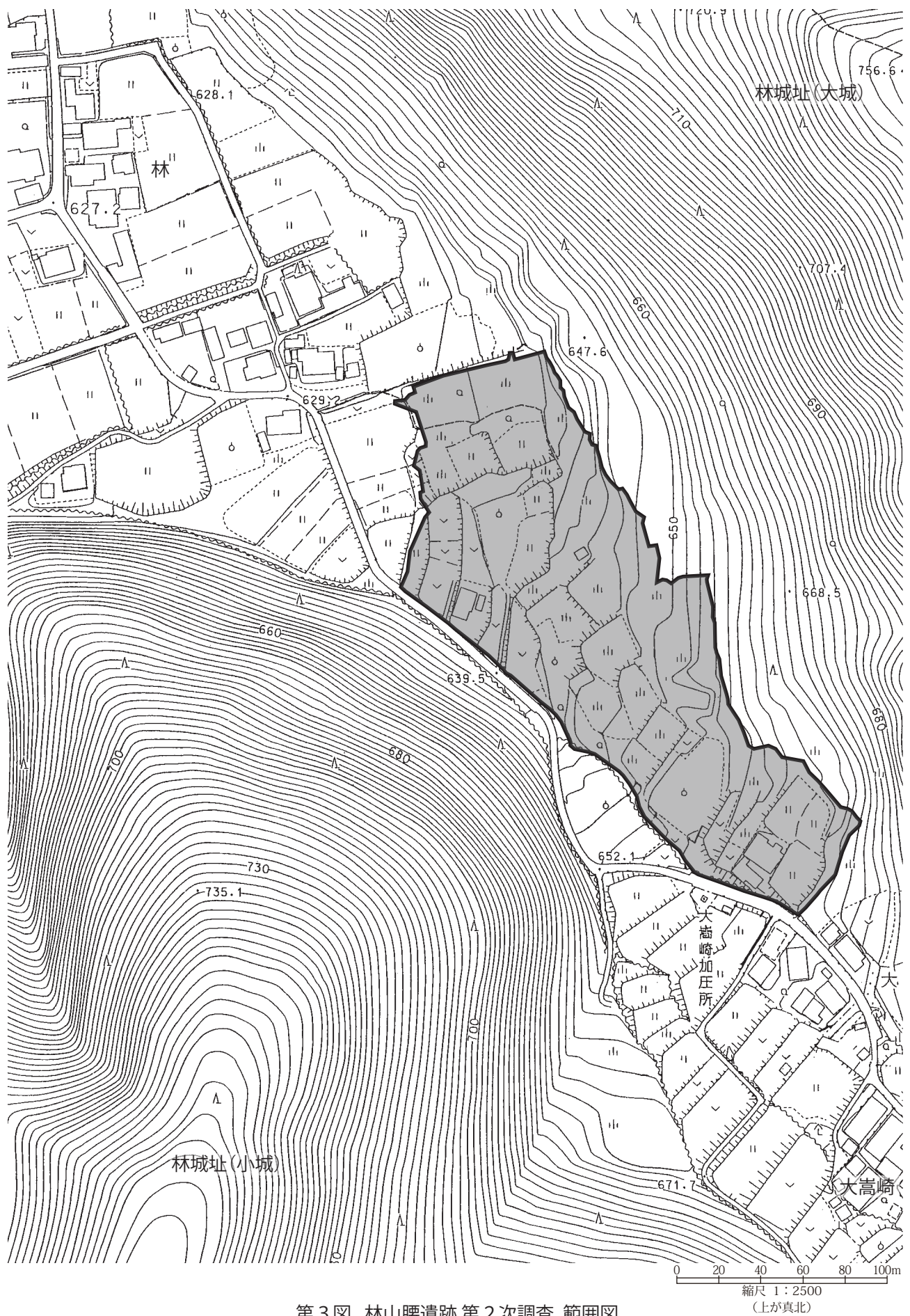
開発区域南東端にあたる平坦面である。A区から南東に向かって棚田状の地形が続いていく最奥部であり、この地区より南東は林城山南西麓の、畑地利用されている斜面となっている。長辺60m×短辺40mの長方形の区画で、西側1/4は宅地となっている。北西側は数段の棚田状水田面を持って一段低い12工のある面に接する。北・東側は林大城南西麓斜面と接する。南・西側は大嵩崎谷底部の緩斜面に接している。また大嵩崎集落へ至る生活道路が接している。

3 調査結果の概要

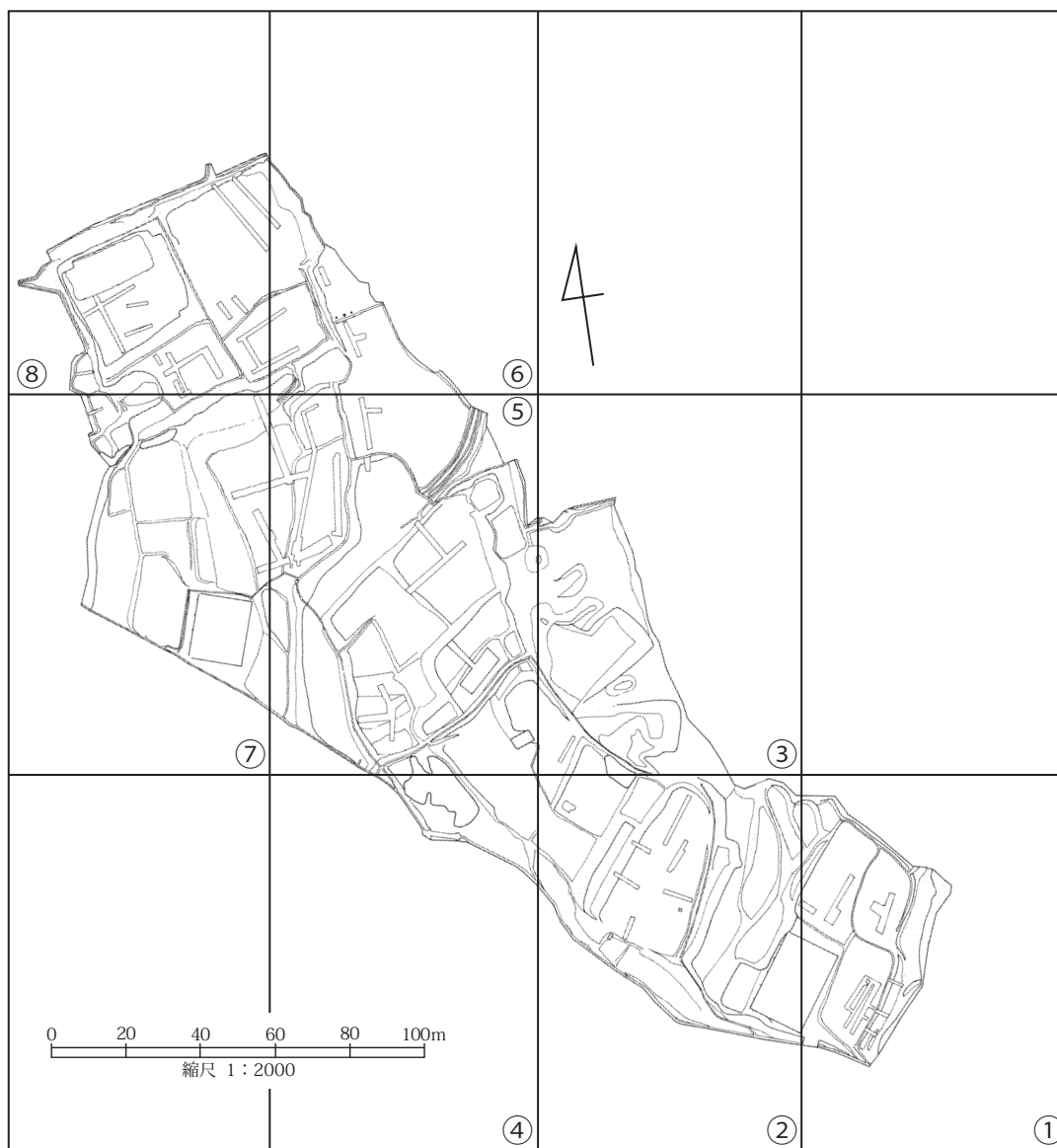
調査期間:平成14年5月23日～平成15年2月15日

調査対象面積:22,000㎡

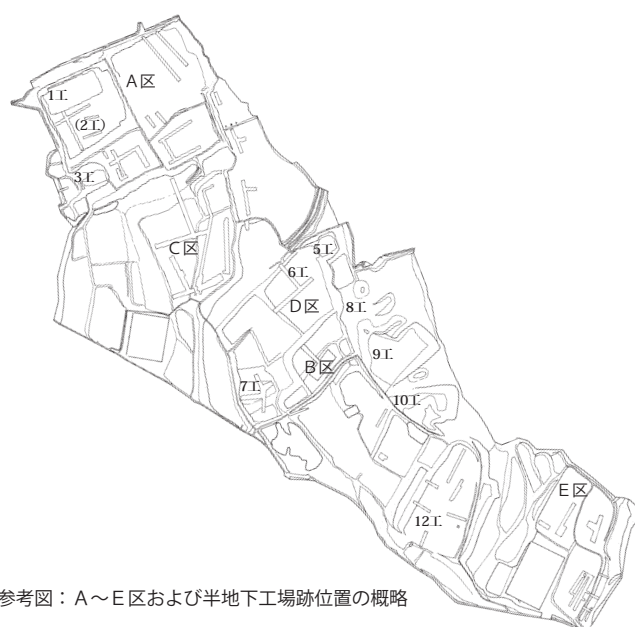
実質調査面積:2507.5㎡(トレンチ調査770㎡、面的調査A区782.5㎡、同E区955㎡)



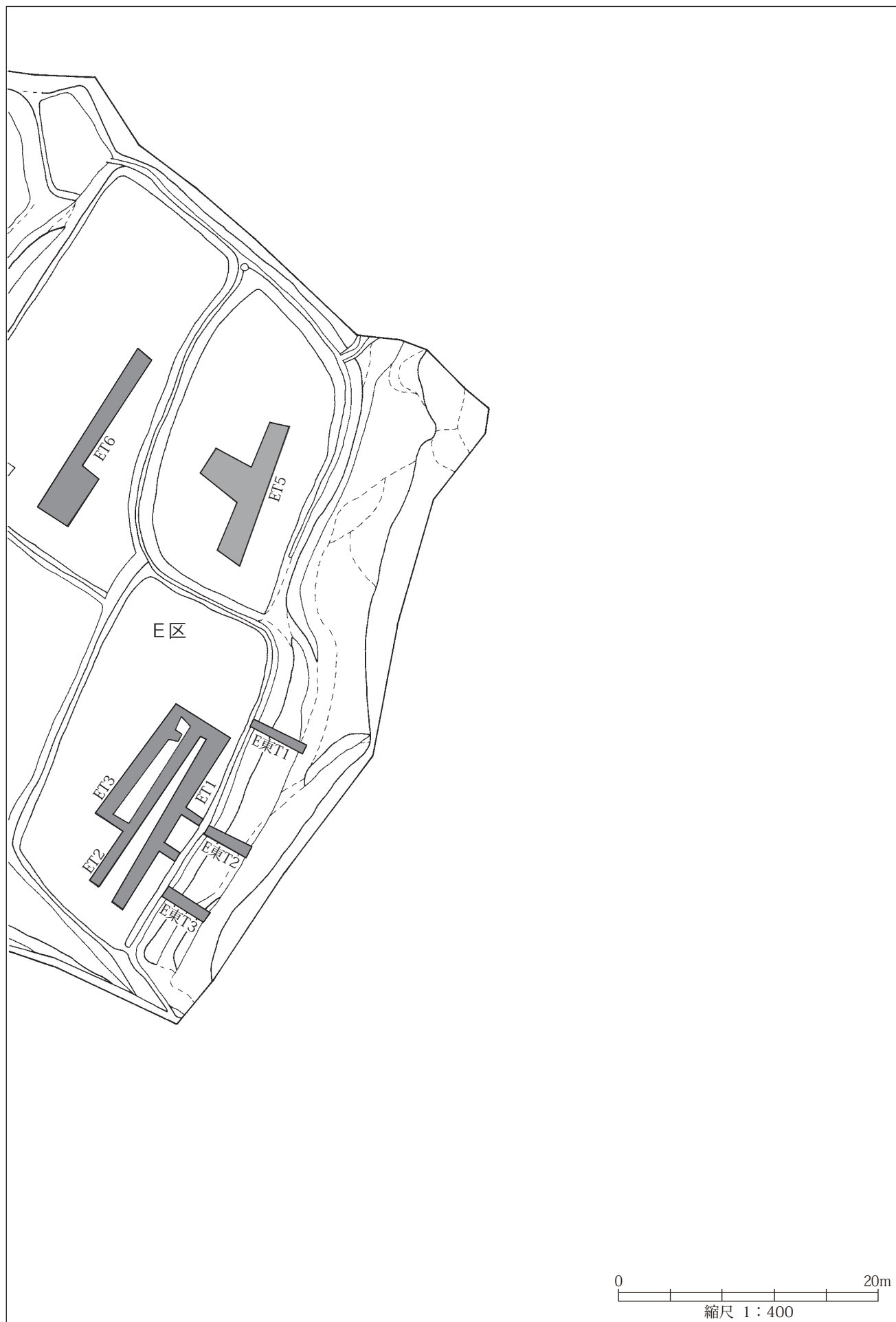
第3図 林山腰遺跡第2次調査 範囲図



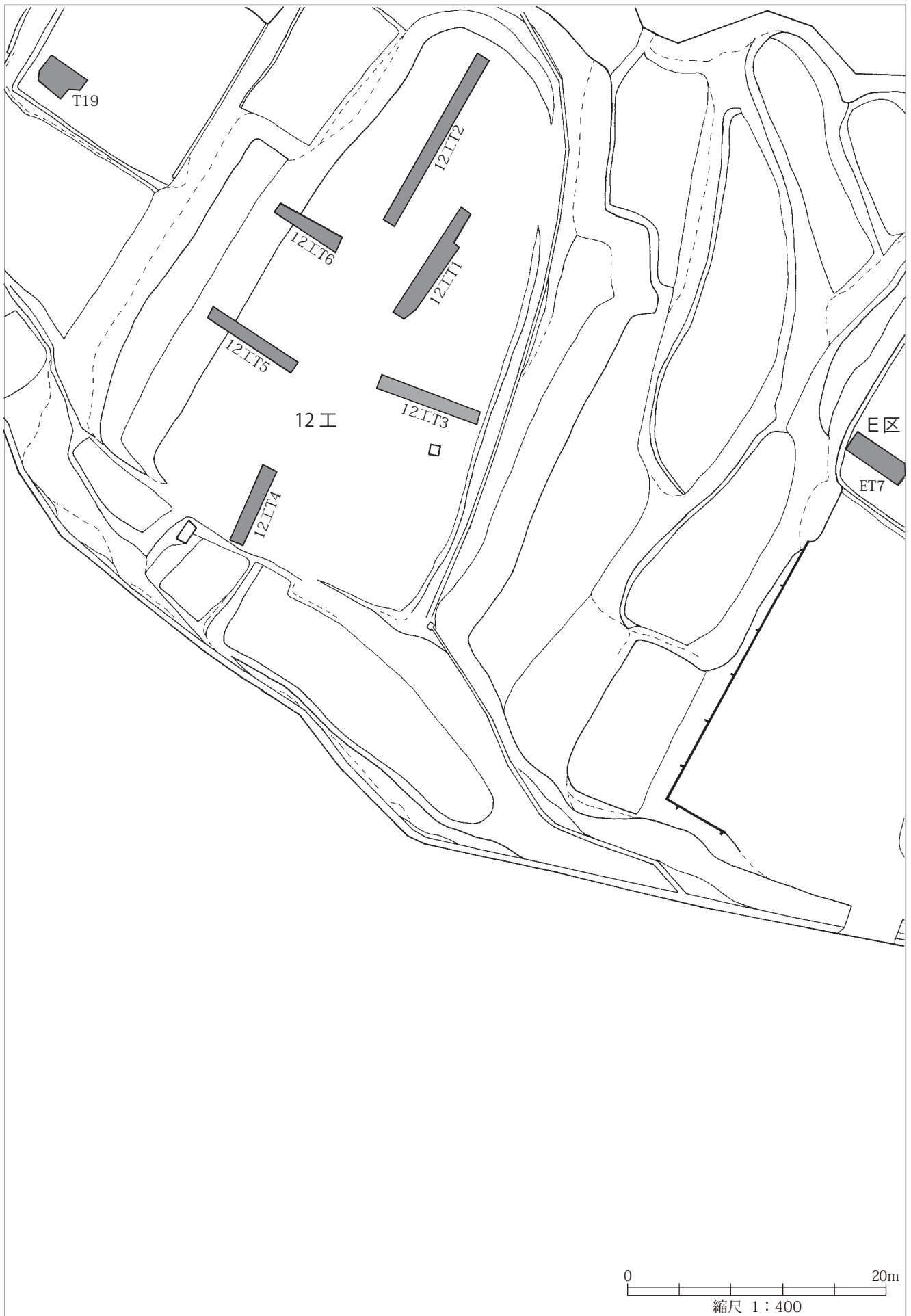
第4図 林山腰遺跡第2次調査 調査区割全体図



参考図：A～E区および半地下工場跡位置の概略



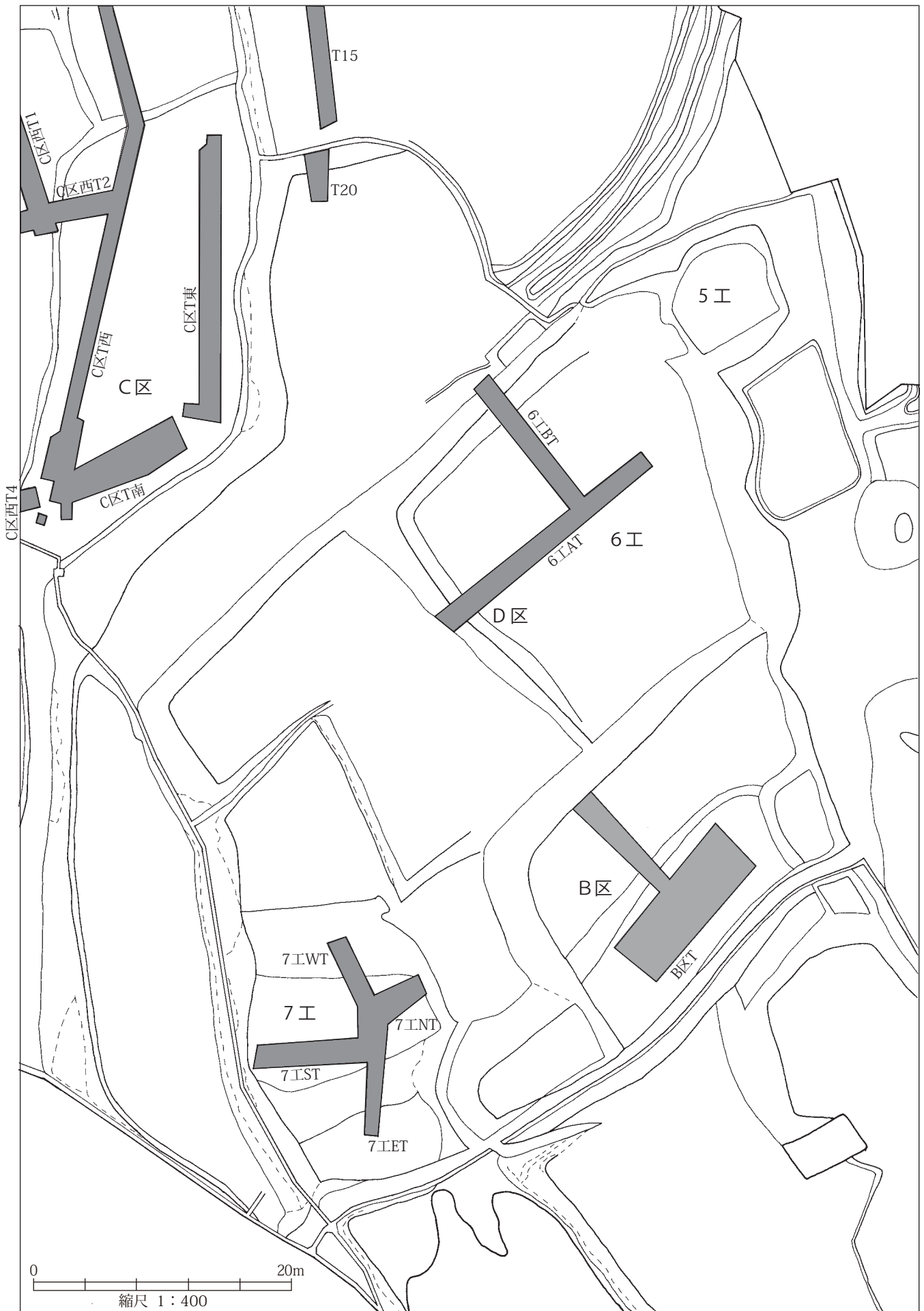
第5図 調査地区割図①



第6図 調査地区割図②



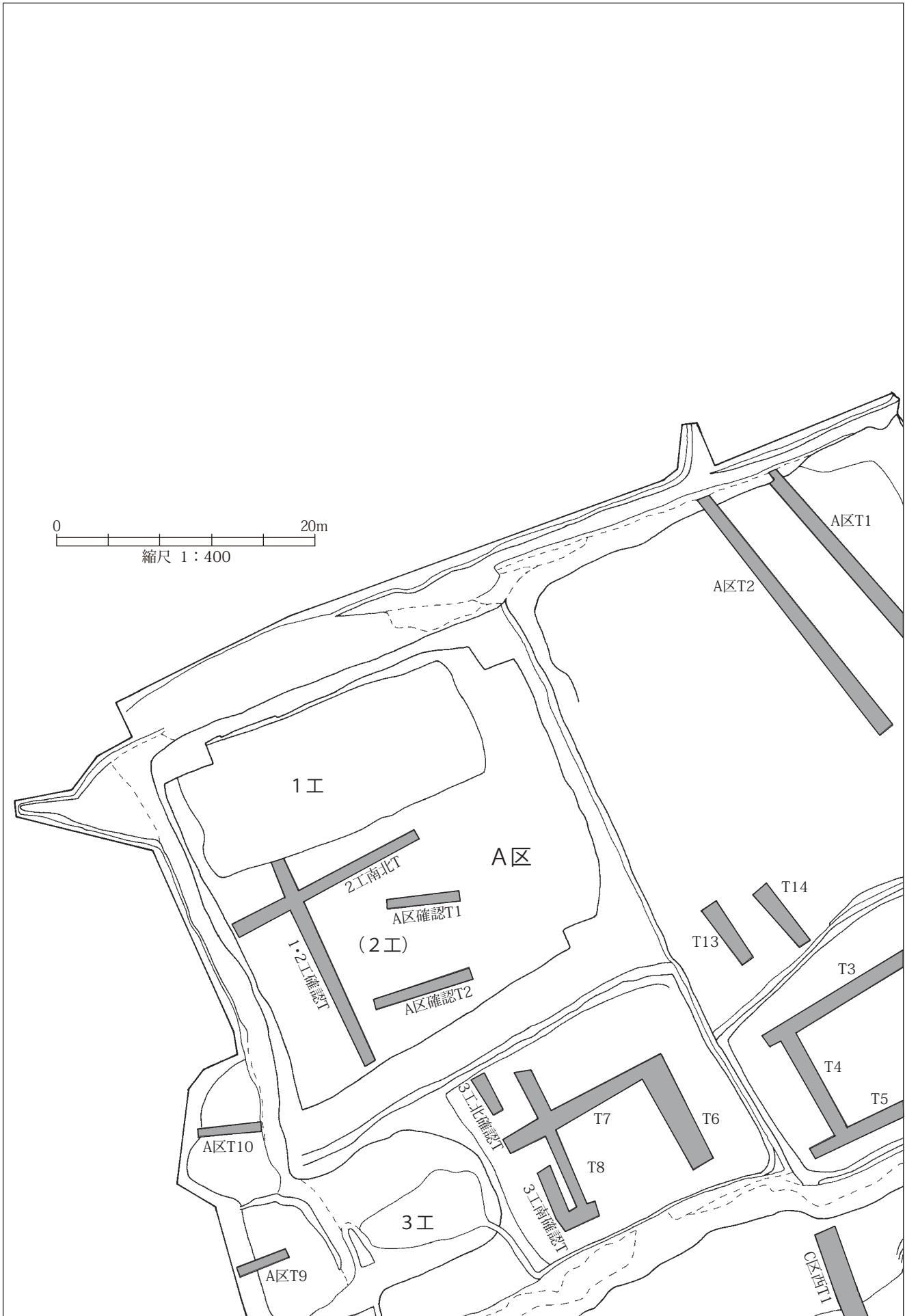
第7図 調査地区割図③④(下:③ 上:④)



第8図 調査地区割図⑤



第9図 調査地区割図⑥⑦(下:⑥ 上:⑦)



第10図 調査地区割図⑧

発見遺構

中世：礎石37、建物址6、石列5、土坑7、縁石列1

近代：半地下工場跡12基(うち10基の存在を確認)

出土遺物

中世：土器・陶磁器、金属製品、木片

近代：建築材(木材、アスファルトルーフィング)、碇子、電線、光学フィルター、電球片(真空管)、獣骨

第2節 中世の遺構・遺物

1 A～D区の遺構

(1) A区

トレンチにより石列2本を確認した。また一部に整地による硬化した可能性のある面状の部分を把握した。さらに現況に残る水路、石垣を観察した。これらの遺構はすべて明確に中世に属するものと確定はできない。

石列はA区北東部に並行して設定したトレンチ1・2において確認され、石列1・2と命名した。いずれも表土下70cmで検出された、自然石を並べた遺構である。石列1・2ともに長さは650cm以上、幅は石列1が200cm、2が100cm前後を測る。いずれも用途については不明で、遺物を伴わないため時期の特定はできない。

整地による硬化した可能性のある面状の部分は、北西部2工南側及び南西部3工東側の水田耕作土下で捉えた。北西部のものは確認した面積が狭く明瞭ではないが、一部に盛り土地形がみられ、その上が硬く締まっていた。南西部のものは、3工裏手の水田耕作土下で確認した。硬化の時期は不明である。

水路はA区を南北に分断する形で現在も使用されている。東半部は一部石組みの素掘り溝で途中で暗渠化し、西半部から再び顕れて両側石組みの水路となっている。幅、深さともに20cm前後を測る。底面は石ではなく突き固めている。石材は川原石に山石が混じる。水路の設けられた時期は不明である。

石垣はA区西面を区画している。調査地一帯の傾斜地の棚田状地形では水田・畑地の土留めに石垣が多用されているが、A区西面の石垣もその一例と考えられた。しかし、本石垣の最下段は石の大きさ(面積)が上段のもの4倍程度以上あり、積み方も上部の落とし積みに対して最下段は大型の石を据えているように見え、明瞭に異なっている。最下段については築造時期は近代よりも遡る可能性がある。

(2) B区

遺構として明瞭ではないが広い範囲に礫が集中しており、礫集中範囲として把握した。時期は不明である。また、西トレンチからは平安時代9世紀後半に属する土師器甕片が出土した。当該時期の遺構が周辺に存在していた可能性がある。

礫集中範囲は調査区の北西側部分を中心にして、水田基盤土下の硬い黄褐色土下部から、全面的に広がる10～30cm大の多量の礫が確認された。上部からの掘り込みは捉えられず、礫の平面的な広がりも不定形であった。

本地区からは土師質土器皿、播鉢などが出土しており、中世に属する何らかの遺構の可能性はある。

(3) C区(第11図)

建物址1基、暗渠状石組1本が検出されたほか、硬化面の広がり確認された。

建物址(第1号建物址：第12図)はC区南部で検出した。水田耕作土下の層位で径50cm前後の扁平な川原石5点と根石(栗石)状の集石を確認したが、それらは長方形に配列するため礎石建物の礎石列と判断した。礎石はそのまま整地面に据えられていた。それぞれの礎石間の距離はいずれも180cmを測る。礎石上面のレベルは標高639.17m前後でほぼ一定している。柱痕及び被熱痕等は確認できなかった。建物址の全形は把握できなかったが、規模は360cm×180cm(梁行6尺×桁行6尺)、2間以上×1間以上であろう。周囲からは土師質土器皿、白磁皿など若干の遺物出土しており、本址の時期は遺物から判断して15世紀から16世紀にかけての

室町時代に属すると考える。

暗渠状石組はC区北部のトレンチ1内、表土下50cmで確認した。東西方向に延びており、C区の北側緩斜面裾部にあたる位置にある。幅は60cmを測る。蓋石のある平面構造を呈するが、内部は時間的制約から調査できなかつた。用途は明らかではないが、蓋石がある点から暗渠状の水路と思われる。等高線に直交していないため排水用とは考えられないが、この東側には現況の水路があることから、そこに接続していた可能性がある。時期については、遺物を伴わないため不明である。

硬化面はC区に設定した東トレンチ内を中心に確認された。主に屏風状土手の北西側に沿った範囲にあたる。建1も基本的にこの面の延長上に構築されている。粘質土と小礫を混交して突き固めたとみられ、現況水田面の基盤土とほぼ等しいレベルであった。下層は礫を含む黄褐色砂質土で、この周辺での地山となっている。層位的には建1と同時期の遺構である可能性があり、整地に伴うものとする。

(4) D区

西トレンチの壁面において暗褐色土の落ち込みを確認し、土師質土器片が出土した。遺構の性格、時期は不明である。

(5) その他の地点

A～D区以外に設定したトレンチ11とトレンチ12から、それぞれ暗渠遺構2本と敷石遺構2基が確認されている。トレンチ19では盛り土に伴う土層が認められた。

暗渠状遺構はA区の東側に設定したトレンチ11の地表下40cmから2条が並行する位置で確認された(写真図版5、2段目左)。方向はいずれも北東から南西に向かい、林城山の斜面に直交する形で掘り込まれている。構造は両者ともほぼ同じで両側に石を並べ、その上に蓋石が載った形となっている。底部に石は敷かれていないが非常に硬く締まっている。内側の幅は概ね20cm前後で深さは15cm前後とみられる。蓋石はいずれも40cm前後を測る。覆土は小礫混じりの暗褐色土で、新しい流水痕等はなかつた。本址の用途は形状からみて水路や暗渠などの可能性も考えられるが確証はない。これらのうち1条はA区内を流れる現況水路(水路1)の延長線上に位置するが、それとの関連については不明である。遺物はなく、所属時期は不明である。

敷石遺構はA区の東側、トレンチ11南側に設定したトレンチ12の地表下20cmから2基が検出された(写真図版5、上段右)。こぶし大の礫を敷き詰めており、平面形は1基は280cm×400cm以上の長方形を呈するとみられるがもう1基の規模及び平面形は不明である。時間的な制約から掘り下げを行っていないため詳細は不明である。本址に直接ともなうものかは不明だが、平安時代9世紀の須恵器杯蓋が1点出土している。

盛り土土層は10工前の水田に設定したトレンチ19で確認された。遺構・遺物はなかつたが、表土及び表土下層土の下は人為的と考えられる縞状の堆積がみられたことから、自然地形ではなく人工的な盛り土地業によるものである可能性が高いと考えられる。時期については遺物を伴わないため不明である。

2 E区の遺構(第13図)

建物址3棟から5棟、土坑5基、石列5条、縁石列1条、溝址3条、石積み遺構1カ所を検出した。これらの遺構に伴って出土した土器・陶磁器類は15世紀第3四半期から16世紀第1四半期の範囲に収まるもので、本地区の各遺構が属する年代もそこに求めたい。

(1) 建物址

礎石とみられる大形で扁平な川原石が規則的な配列で多く検出され、3棟から5棟ほどの礎石建物の存在を想定した。いずれの礎石も礫混じりの整地面を少し掘って設置されており、C区の建1と共通しているが、本地区では建物址周辺の整地面の上に薄く粘土を敷き詰めて化粧土としている。

第2号建物址(第14図) 礎石26～29・37の5点の礎石と3カ所の抜取り痕とみられる窪みから2間四方の総柱式の礎石建物を想定した。平面規模は370cm×370cmを測り、柱間は185cmである。礎石上面に被熱痕のあるものが2個、加工痕の残るものが3個ある。礎石の上面レベルは標高663.78m前後でほぼ一定している。範囲

内の一部上面に炭化物・焼土範囲が1カ所あるが、遺構の切り合い関係はない。

第3号建物址(第14図) 礎石は21～25の5個のみであり、周囲に抜き取り痕はみられなかったが、本址の周辺に集中する4基の土坑を含むエリアを想定すると2×3間、または3×4間の可能性がある。礎石で確認できた平面規模は180cm×600cm(梁行6尺×桁行6尺5寸)を測る。礎石上面に被熱痕のあるものが1個、加工痕の残るものが1個ある。礎石の上面レベルは北側の3個が標高663.77m前後であるが、南側のものは若干沈下している。土7と重複する南側の2個の礎石は下面の構造からみて動かされていないと考える。

第4号建物址(第15図) 礎石1～9・32・36の11点を視野に入れ、2×4間以上の総柱式の礎石建物を想定した。方形に配列する礎石は9個だが、礎石8・9が南東に延びて、隣接する5建と桁方向を揃えているため、この2棟が一連のものとして捉えると3×4間、あるいは3×5間の規模を持つ可能性もある。ただし周囲から礎石の抜き取り痕を確認することはできなかった。今回の調査で確認された最大の建物址で、礎石で確認できる範囲の平面規模は470cm×720cm(梁行8尺×桁行6尺)を測る。礎石上面に被熱痕のあるものが2個、加工痕の残るものが4個ある。礎石の上面レベルは標高663.8m前後で一定している。

第5号建物址(第15図) 建4の南東に隣接して検出した。関連する礎石は11～15・20・35の7個であるが、桁方向を揃える建4と礎石10を介しての連結を想定すると2×3間以上の礎石建物を考えることができる。当初は建4の一部と考えたが、本址の北西側(建4の南東側)に礎石が見つからず、礎石列の軸方向がわずかに異なり、桁行の間幅も異なることから、別の建物と判断した。想定される平面規模は570cm×370cmを測る。礎石の上面に被熱痕のあるものを2個確認している。加工痕のあるものはみられなかった。礎石の上面レベルは標高663.78m前後で一定している。

第6号建物址(第15図) 建5の南東に隣接して検出された。残存する礎石は16～19の4個で、1×1間の礎石建物を想定した。確認できた平面規模は200cm×150cmを測る。礎石上面に被熱痕、加工痕の残るものはみられなかった。礎石の上面レベルは標高663.77m前後で一定している。切り合い関係は溝1を切る。建4と軸方向を揃えて接しており、建4の一部と捉えることも可能である。

(2) 礎石

発見された37点の礎石のうち、礎石30・31は想定した建物址に関連付けられなかった。想定できた建物群と軸を同じにしているので、この一帯に何らかの建物が存在した可能性がある。

また建4南西部や建5に関連付けたものは、軸方向や間隔等の検討によっては、さらに別の建物の存在を想定する必要が生じる可能性は多分にあると考える。

(3) 石列

石を列状に集積配置した遺構が5基確認されている。それぞれの用途は不明だが、形態や石の状況は様々であった。

石列1(第12図) E区北西部土手の縁石列と直交方向に設置されている。検出面とした整地面とほぼ同一の深さで確認された。長さは720cmで、北西から南東方向に延びている。東半部では下部にこぶし大程度の石を幅130cm前後で敷き、その上面に40cm×30cm程度の大型の石を並べている。南東側延長線上に軸を揃えた石列2が存在するので、両者は一連のものとの可能性もある。用途等は不明である。

石列2(第15図) 石列1の延長上にあり、建4・5に近接する。検出面とした整地面とほぼ同一の深さで検出された。長さは300cm、幅は90cm前後を測る。石列としたが、一定した列をなさず、集石状を呈す。3個の20cm大の石を並べた部分に礫が集中し、東側にも同程度の石の列とこぶし大程度の石を集中させている。用途については不明である。前述のとおり石列1との関連が考えられる。

石列3(第16図) 調査区中央部で検出した。検出面とした整地面とほぼ同一の深さで検出された。長さは670cm、幅は80cm前後を測る。石列としているが、一定した列を呈してはいない。石列5が折れた方向に並行しているように見えるため、何らかの関係があると思われる。用途を明らかにすることはできない。

石列4(第16図) 調査区南部で検出した。こぶし大から50cm大の石を長方形に並べている。長軸方向を北西か

ら南東に向けてとり、規模は長軸410cm×短軸210cmを測る。石列としたが、長方形に配列されたものであること、建2・3とほぼ同じ方向で配列していること、規模等から1間×2間程度の建物の基礎である可能性がある。形状から土蔵等の基礎ではないかと考える。

石列5(第16図) 調査区中央部で検出した。両端とも調査区外へ続くため全体の規模は不明であるが、北西から南東方向に伸び、南東端は直角に屈曲すると思われる。北辺1,020cm、東辺110cm、幅30～70cmを測る。直角に南西に折れた部分は石列3と並行する。用途を特定できないが、10～30cmの礫が溝状になって素掘りの溝に石を詰められた状態であることから、暗渠或いは建物の雨落ちの可能性も考えられる。

(4) 縁石列(第12図)

本址は石を列状に配しているため石列とすべきであるが、棚田状地形を呈するE区の北西部縁辺に設置されているため縁石列として区別した。検出当初は田の畔を区画するための石組と考えたが、設置されている面が建物址等と同一面上であることから、中世の遺構群の一部として捉え直した。石列の長さは705cmを測る。北側は一段であるが、南側は2段以上ある可能性がある。構成する石の大きさは一定せず、10cm程度のものから90cmほどのものまである。このうちの一つは、建4等でみられたものと同様の、表面に加工痕が認められることから、何らかの礎石の転用である可能性がある。用途については不明だが、上面レベルが一定しないため建物基礎ではなく、その位置から土留めではないかと考える。時期は遺物を伴わないため断定できないが、この面で検出した多くの遺構と同様と考える。

(5) 土坑

この地区では7基の土坑を確認した。そのうちのいくつかは、この面が火災等に遭った際の焼土を投棄したものとみられる。

第1号土坑(第15図) 調査区東部で検出した。一部が調査区外にかかり、溝1を切る。平面形は、残存部分で120cm×120cmの円形を呈する。深さは25cmで底部はほぼ平坦である。遺物出土はなく、用途、時期については明らかではない。

第2号土坑(第12図) 調査区北部の石列2に並んで確認された。当初は石列2に伴う遺構であると考えたが、覆土中に近代以降の物が含まれるため、戦後の水田築造以前に掘り込まれた穴とみられる。

第3号土坑(第14図) 調査区南部で確認した。規模は105cm×100cmの円形を呈する。掘り込みは15cmと浅い皿形で、覆土中には焼土、炭化物が多く含まれる。穴というよりは、少し掘り窪めて焼土などを投棄した痕跡と捉えた方が適切かもしれない。遺物は土師質土器皿、天目茶碗などである。

第4号土坑(第14図) 調査区南部で確認した。規模は120cm×105cmの円形を呈する。掘り込みは15cmと浅い皿形で、覆土中には焼土、炭化物が多く含まれる。土3と同様、穴というよりは、少し掘り窪めて焼土などを投棄した痕跡に見える。遺物は瀬戸産端反皿などである。

第5号土坑(第15図) 調査区中央部で検出した。石列3・5、溝1に近接している。規模は110cm×110cmの円形を呈する。掘り込みは22cmを測り、底部はほぼ平坦である。内部から遺物の出土はなく、5cm大程度の礫が若干みられたのみである。本址の用途、時期については明らかにすることはできない。

第6号土坑(第14図) 調査区南西部の建3想定エリアで確認した。規模は120cm×110cmの不整円形を呈する。最深は20cmを測るが、掘り込みはなだらかで浅い。覆土中には焼土、炭化物が多く含まれる。底部が焼土化しているため、用途は土3・4・7と同様、焼土等の投棄坑とみられる。遺物として内耳鍋等がみられる。

第7号土坑(第14図) 調査区南西部の建3想定エリアで確認した。規模は570cm×250cmの長円形を呈する。掘り込みは浅く、だらだらと落ち込む。最も深い場所でも20cm程度である。覆土中には焼土、炭化物が多く含まれる。用途は土3・4・6と同様で焼土等の投棄坑とみられ、その中では最も大きいものである。重複関係は建3を切るが、そのうちの礎石2基が若干沈下しながら残存している。礎石底部には整地層が残存していたことから、本址の掘削地業はきわめて微弱なものだったと思われる。覆土中には焼土、炭化物が多く含まれる。遺物は土師質土器皿、瀬戸産端反皿、播鉢、青磁盤などの土器・陶磁器の他、木片も多く含まれる。

(6) 溝址

第1号溝址(第15図) 調査区中央部で検出した。確認された長さは700cmで、東は調査区外へ延びる。西側は徐々に浅くなり、不明瞭となる。幅は概ね100cm前後、深さは概ね10cm前後で、断面形は逆台形を呈する。切り合い関係は建5、土1に切られる。覆土には炭化物粒が微量に含まれていたが、目立った遺物は含まれていない。用途については、建4・5の主軸方向と異なるため不明である。本址の時期は建5に先行する。

第2号溝址(第15図) 調査区東部、建4の西側で検出した。確認された長さは1,200cm、幅は50cm前後、深さは10cmを測る。南北の両端は不明瞭となっている。溝址としたが、出土遺物もなく、覆土の状況と、本址の上面が従前の土地利用として水田の境界になっていた場所であった点から、現況水路の下部である可能性がある。

(7) 石積み遺構

本調査区南東縁辺部の地区外に比高差50cmで幅160cmを測る土手状の段が存在することから、土手基部の構造を確認するためトレンチを3本(E東T1~3)を設定し掘削したところ、そのうちの2本(T2・3)から、土手の下部に南南西から北北東方向に延びるとみられる石組みが確認された。トレンチでの確認なので長さは不明だが幅は20cm前後を測る。用途については、整然と積まれているものではないが、石積みの前後で土質が異なること、また屏風状の土手の下部にあたることから、土留めとして設置されたものの可能性がある。時期については遺物がみられないため不明だが、中世におけるこの面の造成に伴うものの可能性がある。

(8) 整地面

E区においてもC区と同様に整地がなされており、建物址などの遺構もその面を掘り込んで造られている。調査地一帯は基本的に地すべり地形であり、それによって堆積した土砂を地山として、その上に小礫混じりの土を整地して硬化面とし、そこに礎石を据えている。硬化面の上には粘質の土を薄く敷いた化粧土が広がっており、それがこの地区に建物の存在していた時期の地表面であったと考えられる。東側及び南側部分ではその土が被熱して焼土化しているのが確認された。

3 遺物

(1) 土器・陶磁器(第1表)

近代遺構の1・2工及び、A~C・E区の中世遺構・整地土から時期的にまとまった焼物が出土している。

ア 工場跡1(1~4)

土師質土器皿(1~3)、古瀬戸後期IV段階の播鉢(4)がある。1~3はいずれもロクロ成形で胎土の粗いものである。

イ 工場跡2(5)

土師質土器内耳鍋がある。体部からそのまま口縁部が直立し、内面に凹線状のヨコナデが顕著なB類(内耳鍋の分類は市川1999に従う)である。

ウ A区(6~13)

土師質土器皿(6~8)・内耳鍋(11・12)、瀬戸産播鉢(9・10)がある。6・8はロクロ成形で胎土の粗いもの、7はロクロ成形で薄手、白色・精良のものである。11は口縁部が直立し内面に凹線を有するB類である。9は口縁部形態から大窯1段階の播鉢I類(古瀬戸・大窯の分類は藤澤1991に従う)、10も同時期か古瀬戸後期IV新段階に位置づくものであろう。13は埴塙の破片である。

エ B区(14~18)

土師質土器皿(14~16)、瀬戸産陶器腰折皿(17)・播鉢(18)がある。14~16はいずれもロクロ成形で16のみ薄手、白色・精良、他は胎土の粗いものである。17は灰釉を施し見込みは拭き取り露胎とする。底裏も露胎で高台は削り出す。古瀬戸後期IV新段階に位置付く。18は古瀬戸後期IV新段階の播鉢II類である。

オ C区(19~32)

土師質土器皿(19~21)、大窯の稜皿(22)、青磁碗(31)、白磁皿・碗(23~30)、青花皿(32)がある。19~21

はいずれもロクロ成形で胎土の粗いものである。22は大窯2段階の稜皿で内面及び口縁部外面に鉄釉を施し、回転ヘラ削りを施す外面下半は露胎である。端部は外反し尖る。31は細線による蓮弁紋を施すB4類(青磁碗の分類は上田1982に従う)である。23～29はいずれも端反の皿・碗で、23は碁笥底の皿、30は大型の皿、29は碗であろう。いずれもE群に属する(白磁の分類は森田1982に従う)。32は端反皿B1群の底部片であろう(青花の分類は小野1982に従う)。

カ E区(33～99)

まとまった量が出土している。土坑7出土の一括資料を主体に土師質土器皿(33～46)・大型皿(47)・片口鉢(82)・内耳鍋(97～99)、瀬戸産端反皿(48～73)・縁釉挟み皿(74・75)・天目茶碗(76～81)・蓋(85)・播鉢(83・84)、青磁碗(86)・香炉(87)、盤(88)、青花端反皿(89～94)、碗(95・96)がある。また、図示していないが大窯3段階に比定される天目茶碗と時期不明の茶入の小破片が1点ずつある。

33～46はいずれもロクロ成形で、薄手の37・40・41のみ胎土が精良、他は粗いものである。47は胎土が粗く体部下半から底面をヘラ削りする大型皿である。82は内耳質で播目は施さない。97・98は口縁部が内湾気味に直立するが体部との境は不明瞭で、B類に位置付く。98は浅めの器形である。

48～73は全面灰釉施釉の端反皿で、一括性の高い個体群である。48・49は底裏を削り込み碁笥底となるB類で珍しい。他は先端が尖る断面三角形の貼り付け高台を付したA類である。48・51～56・63・64・73は見込みに引花文が施される。51・52・53・55・63・64・72は底裏に輪トチ痕を残す。50・53は口縁部の破断面に漆継ぎ痕が観察される。74・75はやや厚く外反する縁釉挟み皿で、外面は露胎である。76～81は小さく玉縁状となる口縁端部に半球形の体部を有する形態で、黒色の鉄釉が施される。78の下部及びD類の底部片80・81には鉄化粧が観察される。80・81の輪高台は小径で削り込みも浅い。83・84は内面にタール状の付着物が見られる。85は小壺の蓋で、外面に灰釉が施される。

86は細線による蓮弁文を施すB4類の碗で、弁先は波状文化している。87は底部片もあるが図化できなかった。88は厚手で大型の器形である。89～94は端反皿B1群に属する特徴を有する。95は碗C群、96はD群とみられる。

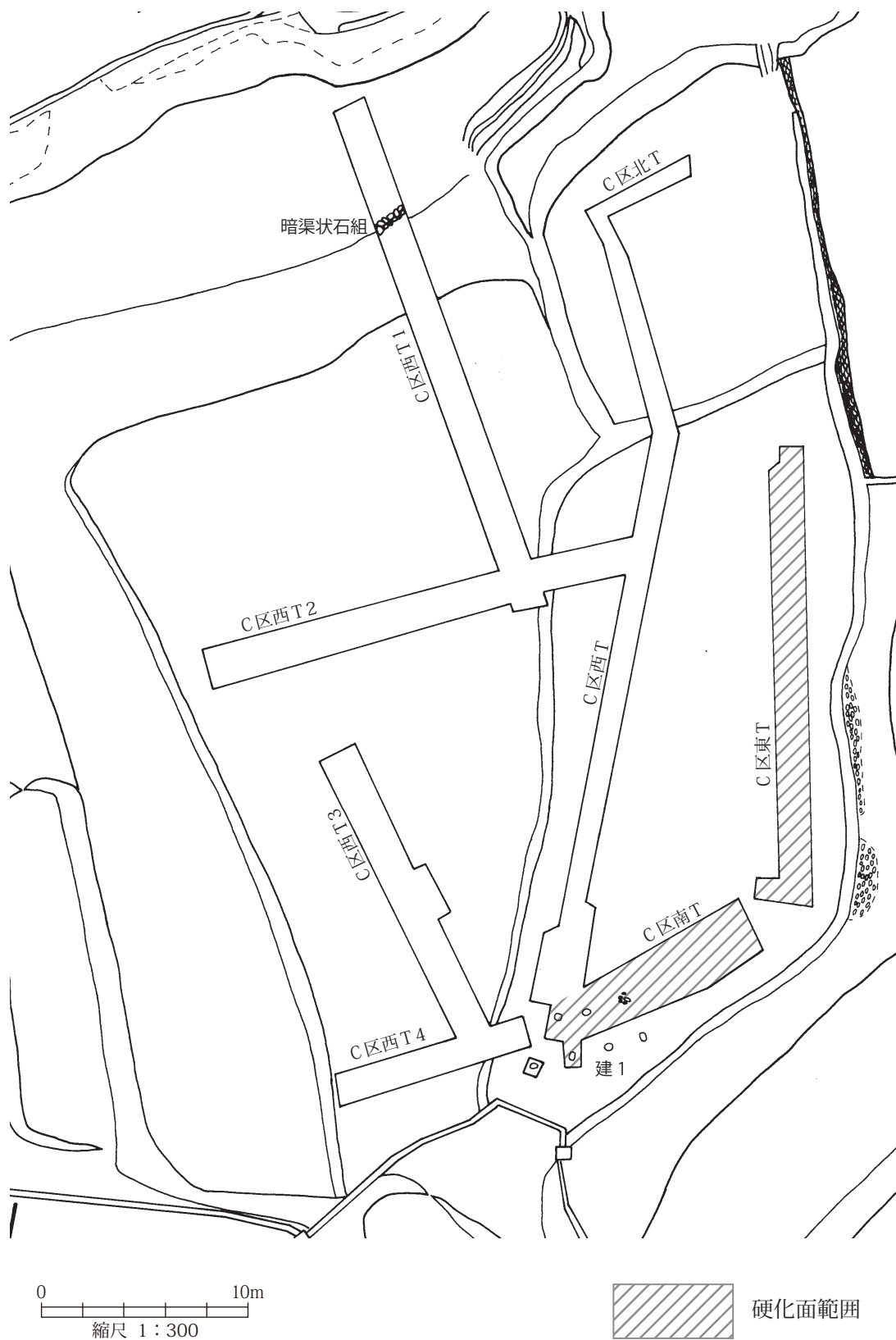
キ 林山腰遺跡出土の中世土器・陶磁器の特徴

これらの資料群は、E区出土の瀬戸製品を中心に非常に時期幅が狭いものといえる。一部の例外を除き、その中心となる時期は資料の主体を占める端反皿と天目茶碗で、藤澤編年の大窯1段階(1480～1530年頃)に位置づく。これに伴う青磁・青花類も小野編年のⅡ期(15世紀後葉～16世紀前葉)に見られる形態で矛盾はない。在地産土師質土器は年代的根拠に乏しいが、B類を主体とする内耳鍋は市川隆之氏により15世紀後半～16世紀初頭の年外観が提示されており、やはり矛盾しない。他地区の焼物も概ね同様で、B区では1型式先行する古瀬戸後期Ⅳ新段階の腰折皿(17)や播鉢(18)が見られる他は本質的な違いは見受けられない。

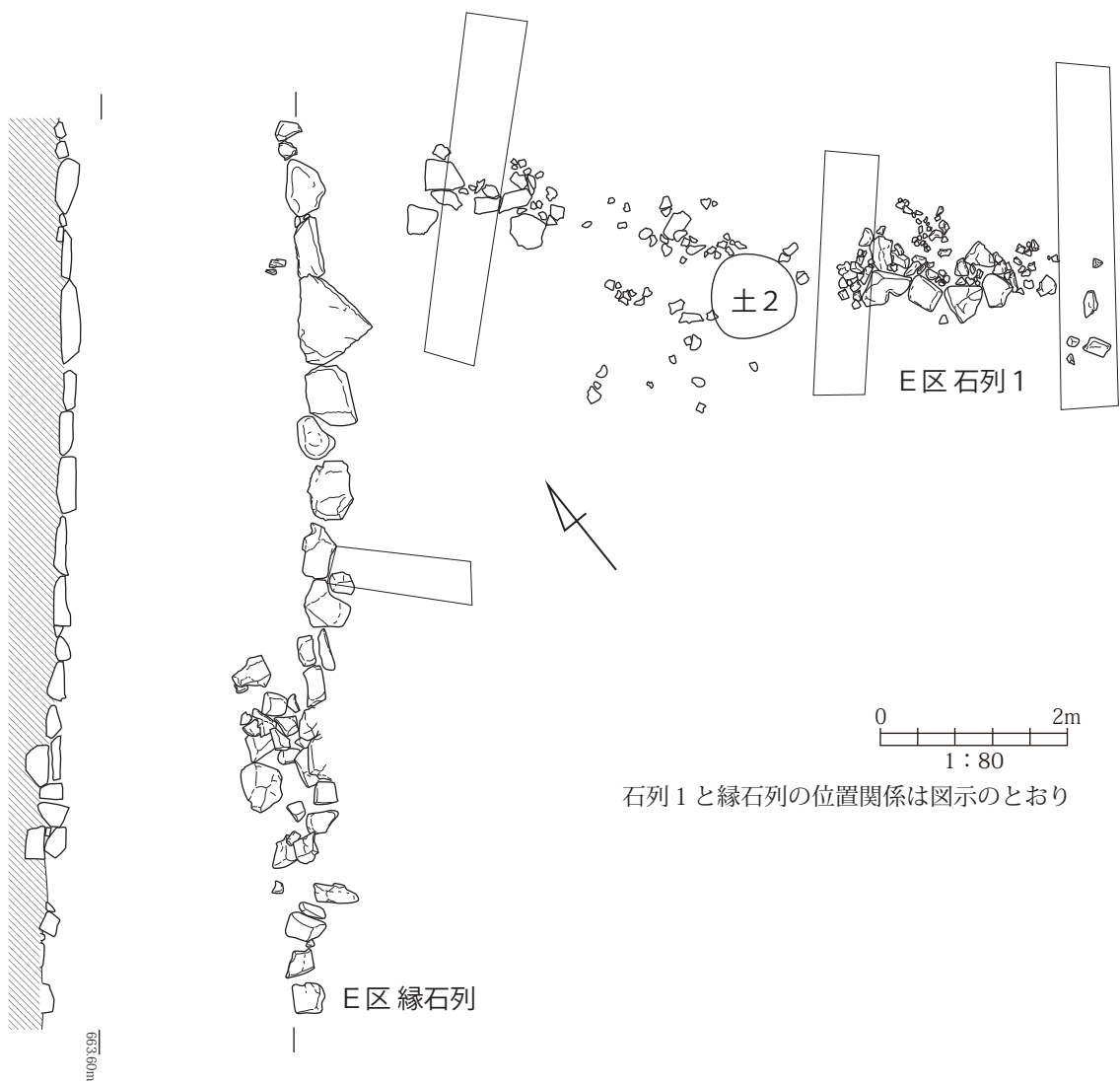
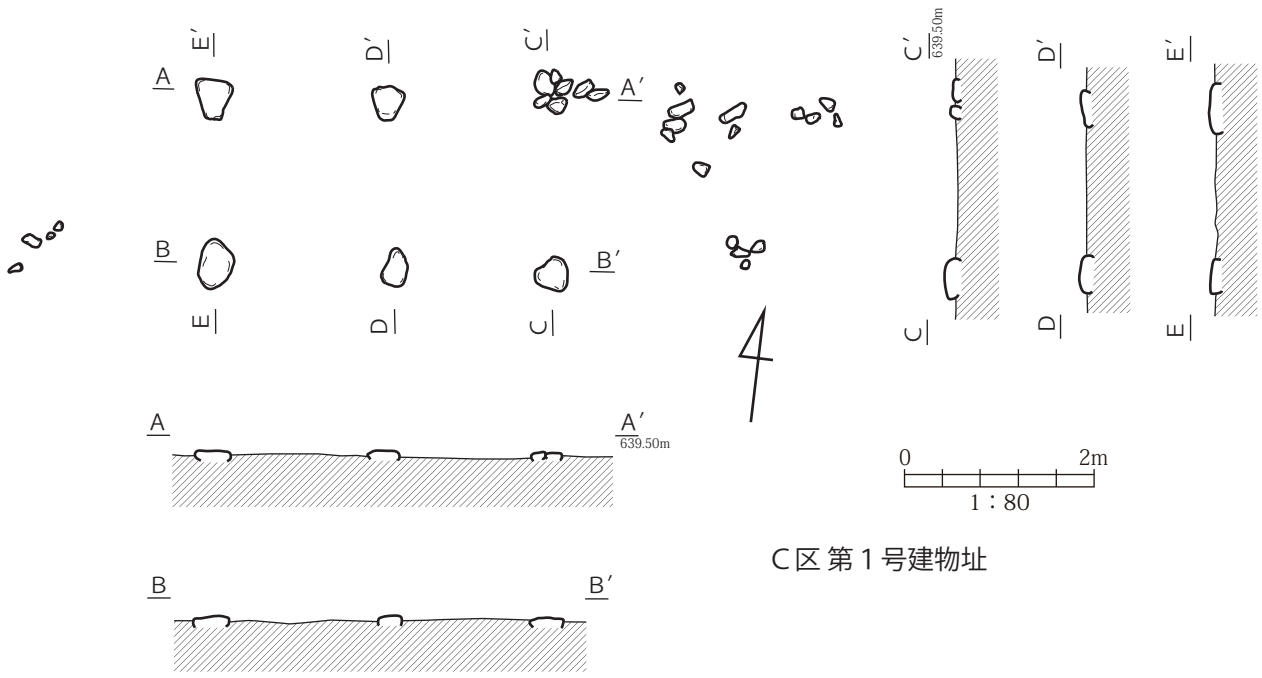
総体として林山腰遺跡出土焼物群を捉えるなら、15世紀第3四半期から16世紀第1四半期までの範囲に収まる資料群として位置付けられ、とりわけE区の資料群は大窯1段階すなわち15世紀末～16世紀初頭に絞り込まれる。これに後続する16世紀末までのものもごくわずかにみられるが希薄で、「群」と捉えるまでには至らない。このように焼物のあり方は林山腰遺跡の消長を考えるうえで非常に示唆的といえよう。

(2) 金属製品(第2表)

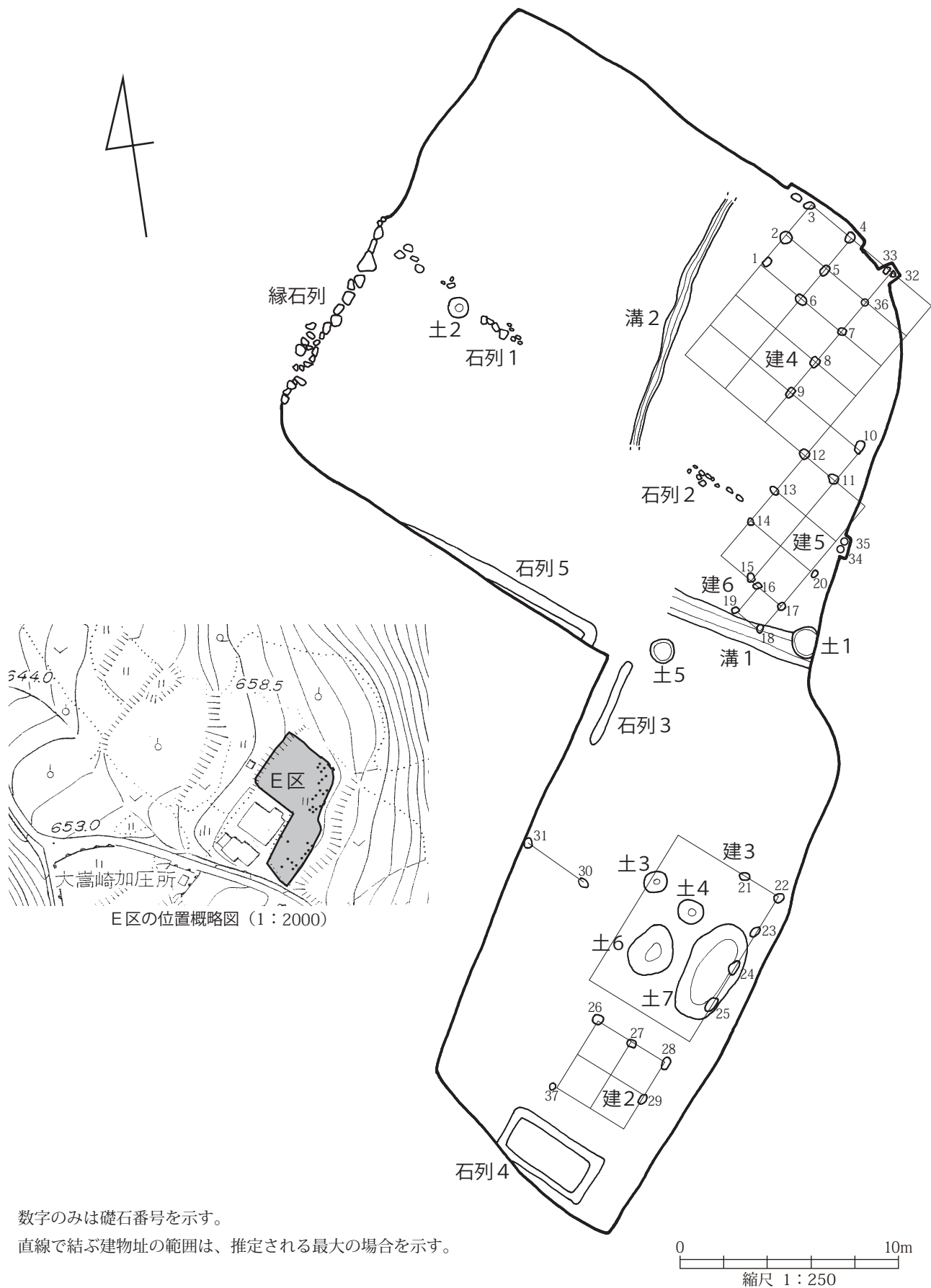
今回の調査で出土した金属遺物の一覧を第2表に示す。このうち中世の所産とみられる金属製品は少なく、相当するものとしては銭貨7点(63・95・98・113～117)、鉄器1点(119)の他は、鉛製の弾丸状のもの2点(110・112)にすぎない。他は近世・近代以降のものとする。銭貨には開元通宝(初鑄621年:唐)、祥符通宝(初鑄1008年:北宋)、皇宋通宝(初鑄1039年:北宋)、嘉祐元宝(初鑄1056年:北宋)、熙寧元宝(初鑄1068年:北宋)、元豊通宝(初鑄1078年:北宋)、永樂通宝(初鑄1411年:明)があり、熙寧元宝のみ2点、他は1点ずつの出土である。祥符通宝がA区、熙寧元宝の1点がB区、他のすべてはE区から出土した。銭貨のうち6点の拓影を第19図に示す。2点の弾丸状製品は直径1.2cm前後の鉛製の球体で、E区から出土した。



第11図 林山腰遺跡 C区全体図

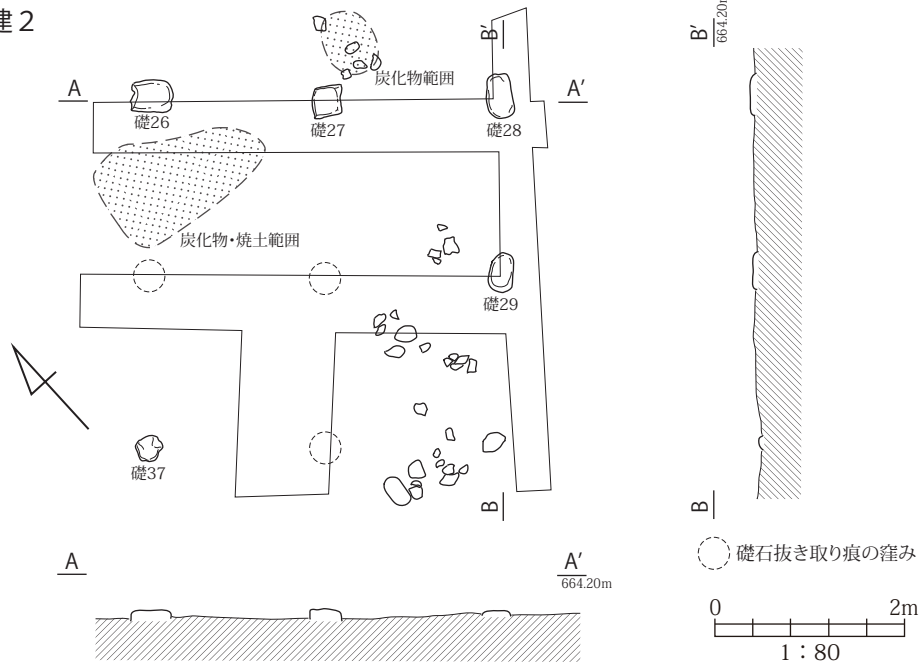


第12図 C区建物址1、E区石列1・縁石列

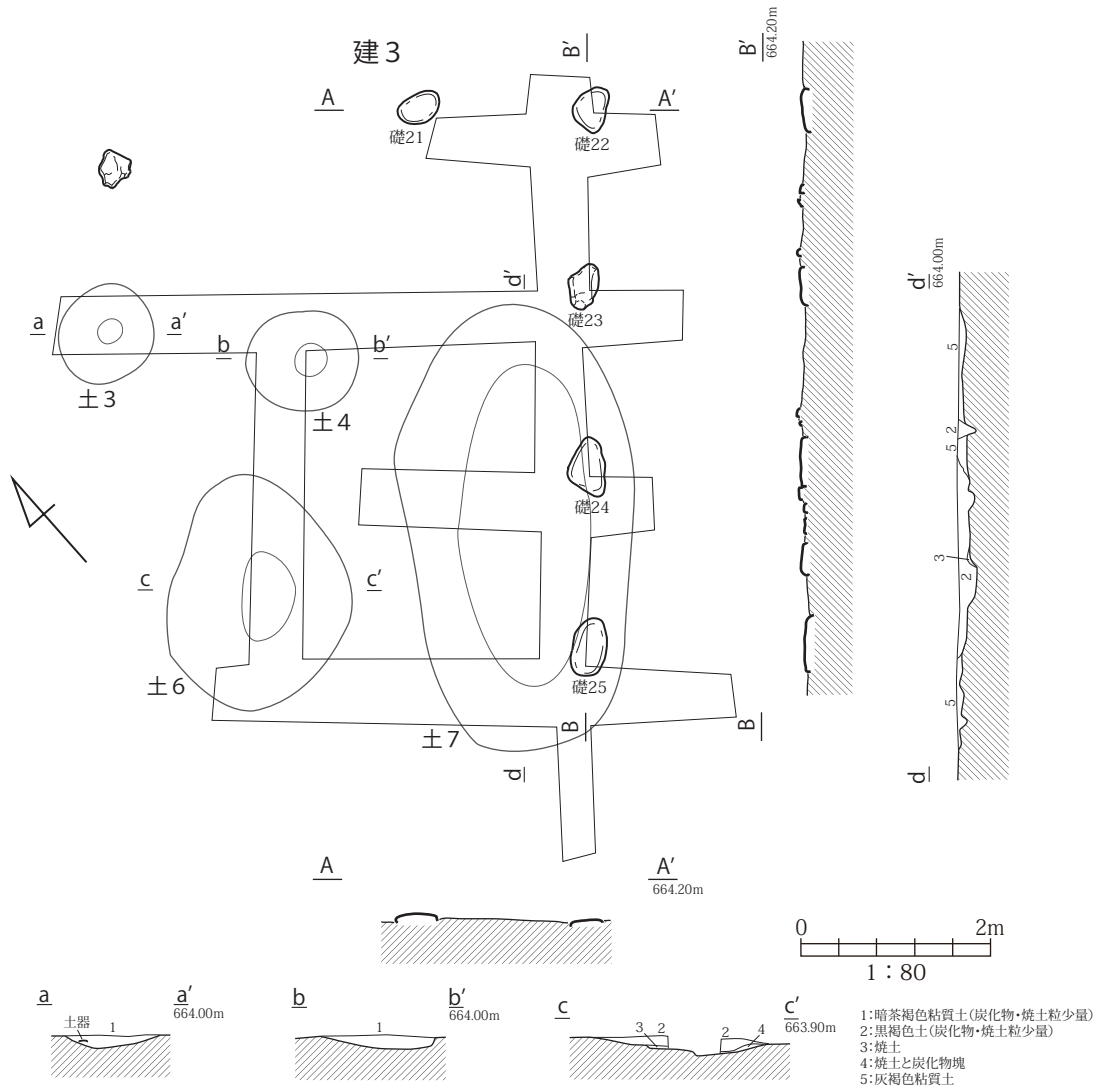


第13図 林山腰遺跡 E区全体図

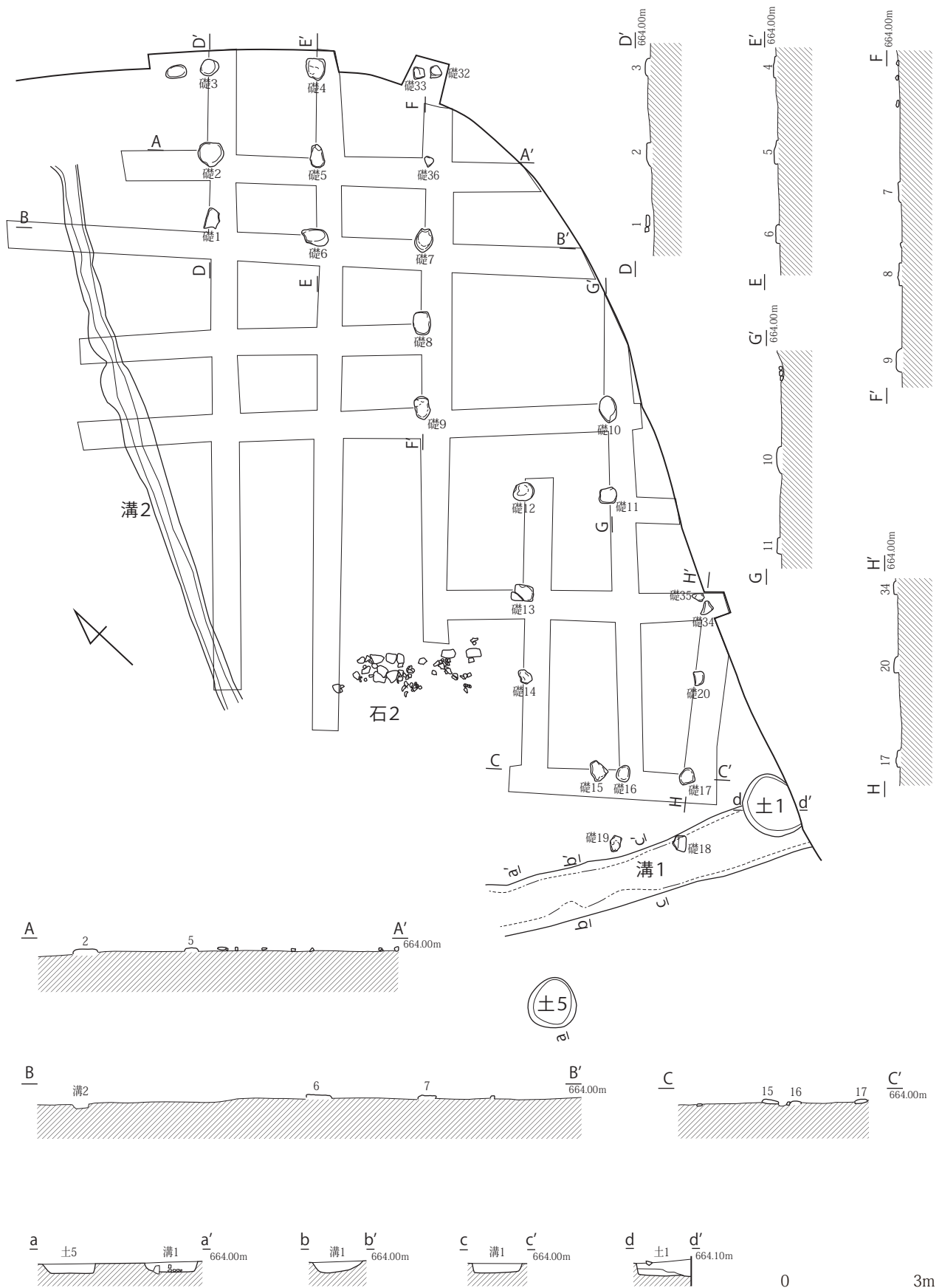
建2



建3

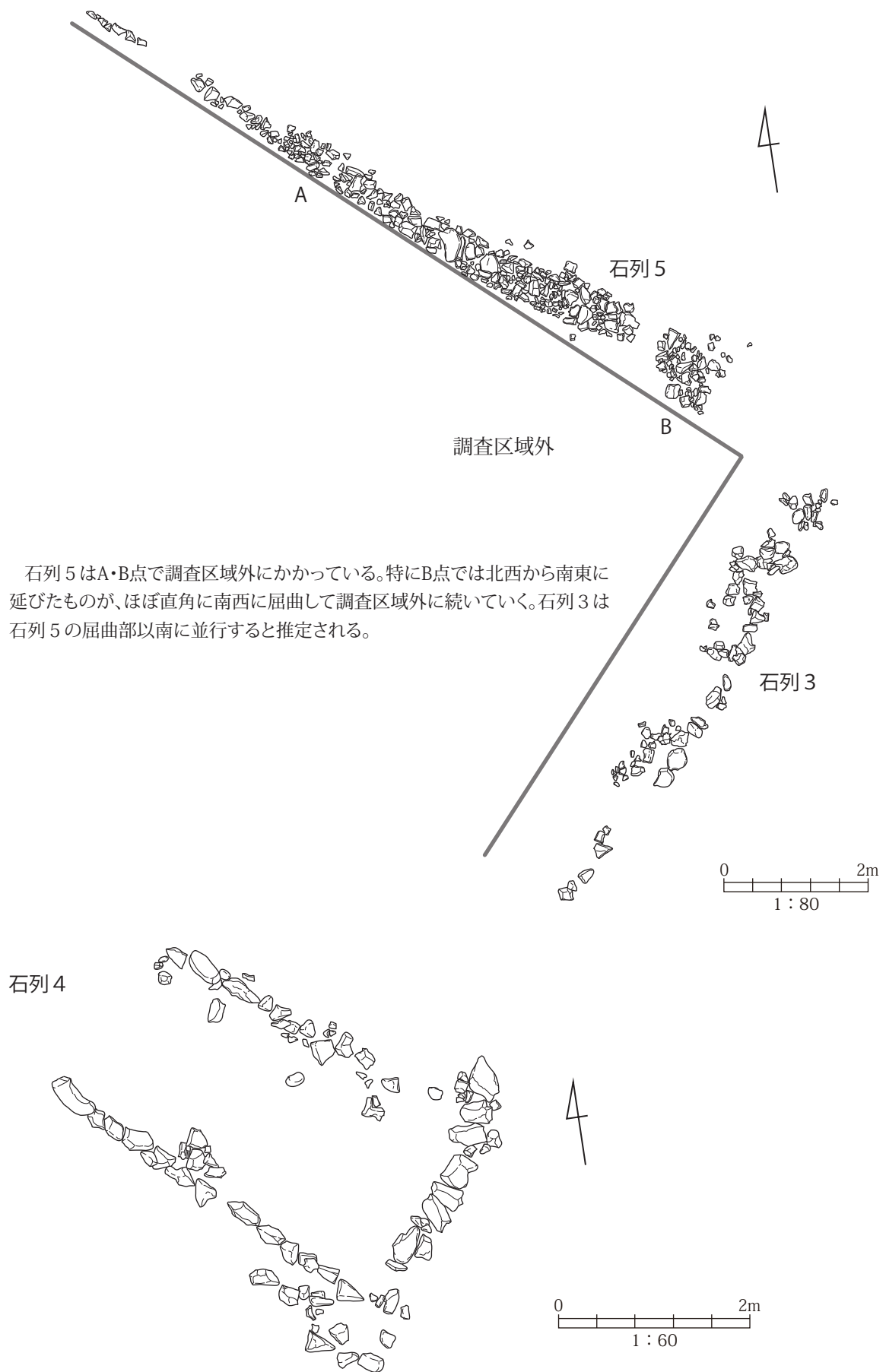


第14図 E区建物址2(上)、建物址3・土坑3・4・6・7(下)



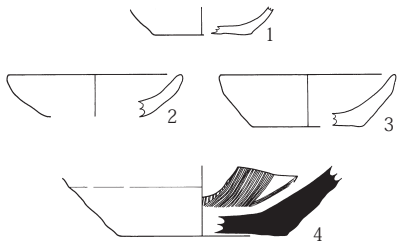
溝1: 茶褐色粘質土(炭化物粒微量混入)
 土1: 1層-青灰色粘質土、2層-灰褐色粘質土
 土5: 暗褐色粘質土(3~10cm礫混入)

第15図 E区建物址4・5、土坑1・5、溝1・2、石列2

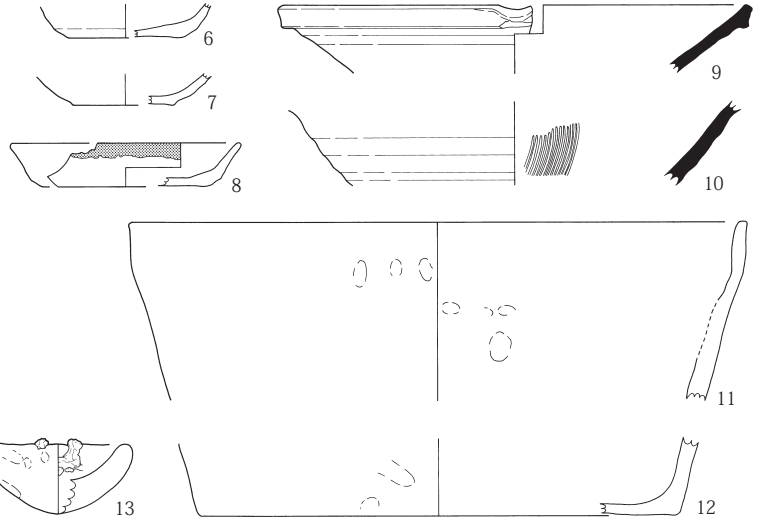


第16図 E区石列3・5 (1:80)、石列4 (1:60) 平面図

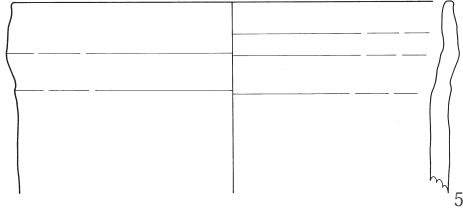
工場跡 1 (1~4)



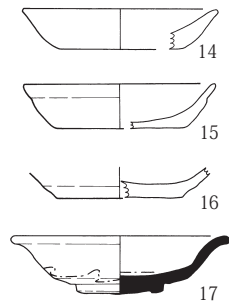
A区 (6~13)



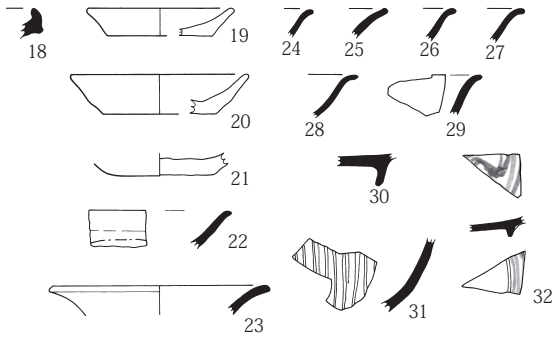
工場跡 2 (5)



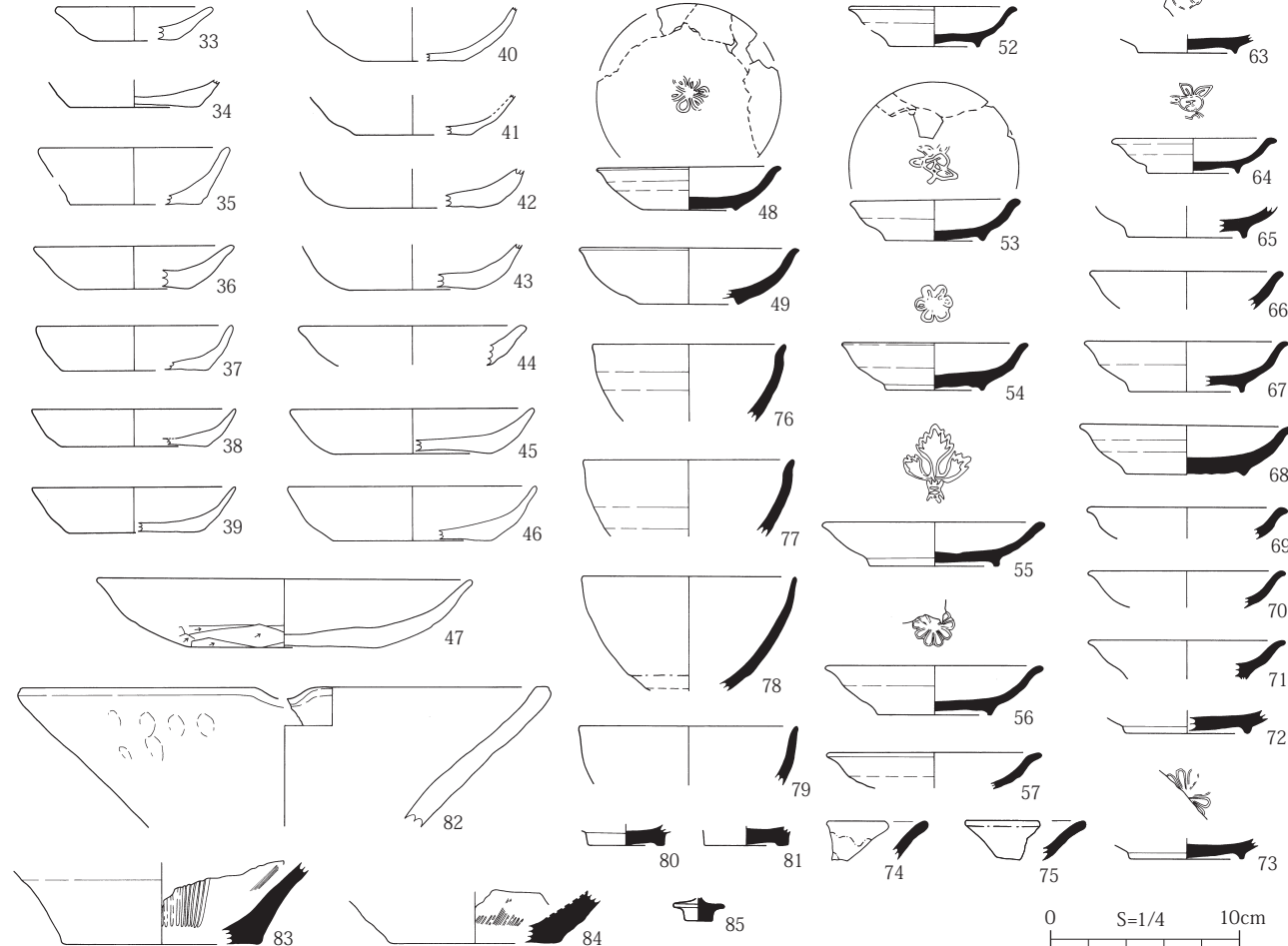
B区 (14~18)



C区 (19~32)

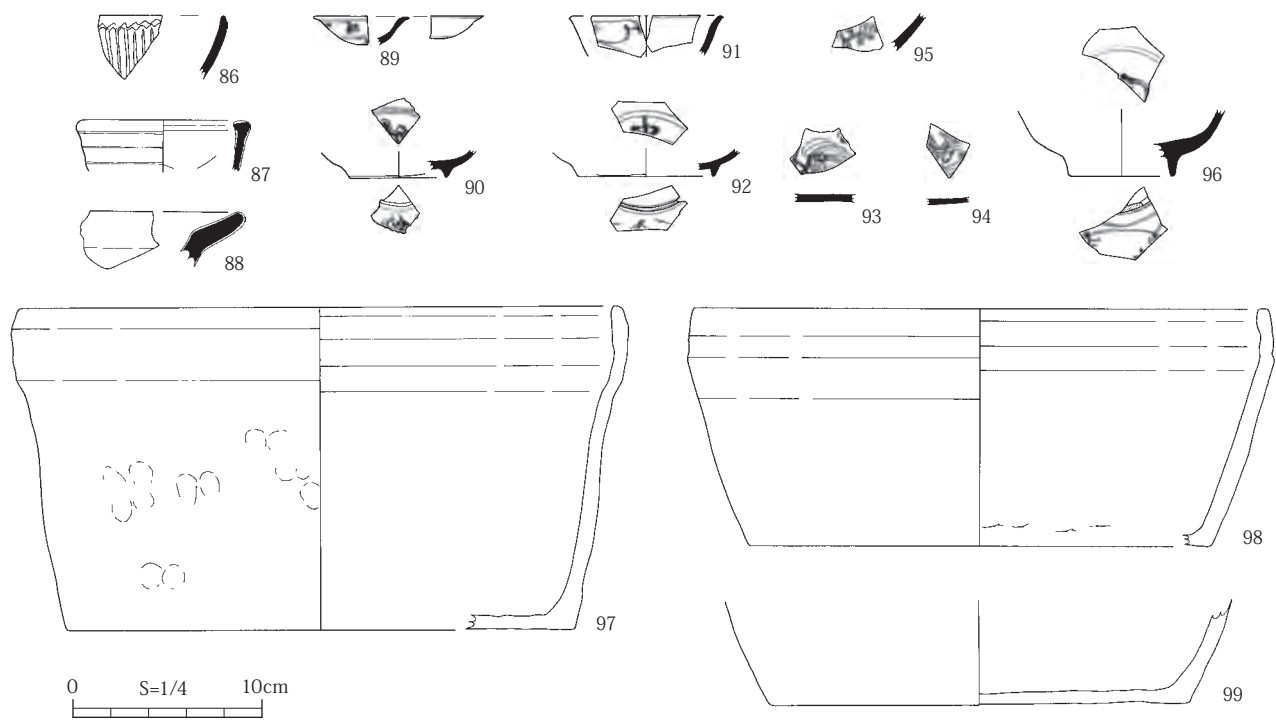


E区 (33~99)



0 S=1/4 10cm

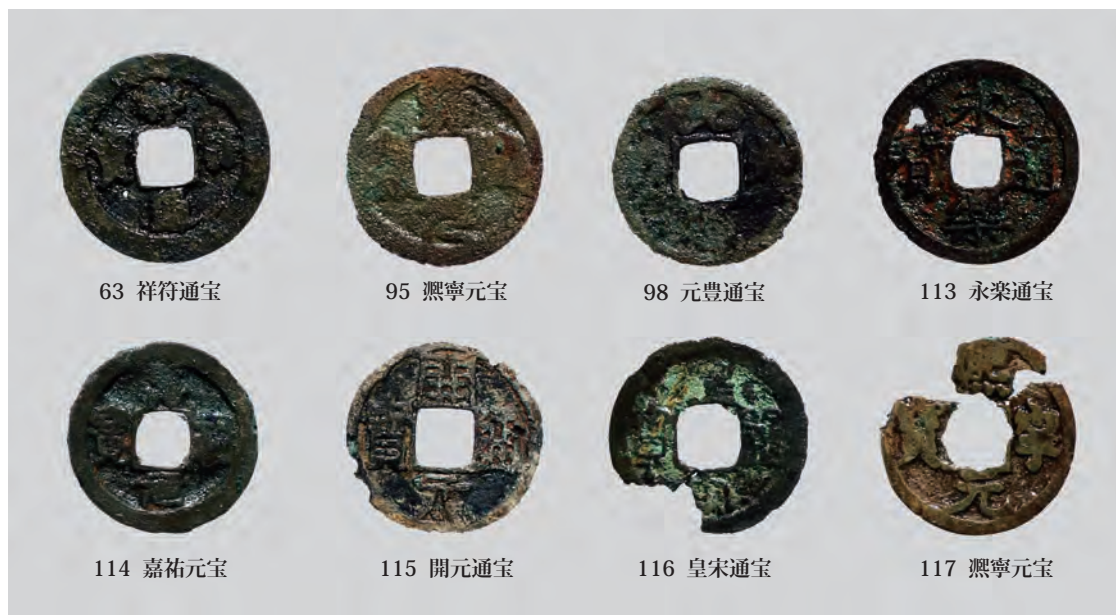
第 17 図 中世の土器・陶磁器 (1)



第18図 中世の土器・陶磁器 (2)



第19図 銭貨



No.	実測No.	区	出土地点	注記	種別	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	釉	備考
1	工場5	A	工場跡1	11015	土師質土器	皿		5.2			1/4		
2	工場4	A	工場跡1	11015	土師質土器	皿	9.2	5.6		1/8			
3	工場6	A	工場跡1	11015	土師質土器	皿	9.3	5.8	2.65				
4	工場3	A	工場跡1	11003	陶器(古瀬戸)	掃鉢		9.0			1/4	錆釉	後期IV新
5	工場1	A	工場跡2	21026	土師質土器	内耳鍋	23.4			1/8			B類
6	A2	A	西トレ	A019	土師質土器	皿		6.1			1/8		
7	A1	A		A017	土師質土器	皿		5.2			1/8		
8	A9	A	土層確認トレ	A001	土師質土器	皿	12.1	9.0	2.25	1/8	1/8		灯明皿
9	A8	A	中央土層確認トレ	A009	陶器(大窯)	掃鉢	24.3			1/12		錆釉	I類、大窯1項
10	A7	A	トレ	A006	陶器(古瀬戸・大窯)	掃鉢						錆釉	古瀬戸後期IV新〜大窯1
11	A4	A	建2・E区2トレ	A023・E116	土師質土器	内耳鍋	32.5			1/16			B類
12	A5	A		A017	土師質土器	内耳鍋		25.2			1/14		
13	A3	A	東トレ	A018	土製品	埴塼	7.1			1/4	1/4		内面の全面に銅付着
14	B2	B	Aトレ遺構	B001	土師質土器	皿	10.4	8.8	2.15	1/12			
15	B3	B	検出面	B007	土師質土器	皿	10.2	7.0	2.3	1/12	2/5		
16	B1	B	検出面	B007	土師質土器	皿		6.6			3/8		
17	B4	B	P1	B002	陶器(古瀬戸)	腰折皿	11.0	3.8	3.05	1/4	完	灰釉	見込み釉拭き取り・重ね焼き痕、外底露胎・削り出し高台、後期IV新
18	追加1	B	検出面	B007	陶器(大窯)	掃鉢				破		錆釉	II類、大窯1項
19	C3	C	排土	C007	土師質土器	皿	7.8	5.4	1.9	1/4	1/5		
20	C2	C	2トレ	C002	土師質土器	皿	9.5	6.0	1.05	1/8	1/16		
21	C1	C	2トレ	C003	土師質土器	皿		5.7			完		
22	C4	C	礎石建物	C006	陶器(大窯)	稜皿						鉄釉	外面下半露胎・回転ヘラ削り、端部尖る、大窯2
23	C5	C	排土	C007	白磁	皿	11.2					白磁釉	端反、碁碁底か、E群
24	追加12	C	礎石建物	C006	白磁	皿				破		白磁釉	端反、E群
25	追加15	C	2トレ西	C002	白磁	皿				破		白磁釉	端反、E群
26	追加14	C	2トレ西	C002	白磁	皿				破		白磁釉	端反、E群
27	追加13	C	2トレ西	C002	白磁	皿				破		白磁釉	端反、E群
28	追加11	C	2トレ西	C002	白磁	皿				破		白磁釉	端反、E群
29	C6	C	2トレ	C002	白磁	碗						白磁釉	端反、E群
30	追加5	C	2トレ西	C002	白磁	皿					破	白磁釉	端反、E群
31	追加4	C	3トレ	C004	青磁	碗				破		青磁釉	B4類、ヘラ状工具による細線文
32	追加3	C	2トレ西	C002	青花	皿				破		呉須・透明釉	B1群
33	E48	E	建2検出面	E007	土師質土器	皿	8.3	4.6	1.7	1/8	1/12		
34	E43	E	建3検出面	E038	土師質土器	皿		6.8			2/5		
35	E46	E	建3検出面	E042	土師質土器	皿	10.1	7.1	2.9	僅	3/4		
36	E56	E	建2検出面	E007	土師質土器	皿	10.6	6.2	2.2	1/4	1/3		
37	E50	E	土7	E118	土師質土器	皿	10.4	9.8	2.3	1/12	1/16		
38	E45	E	土7	E043・116	土師質土器	皿	10.8	8.2	1.95				
39	E44	E	土3・土5	E071	土師質土器	皿	10.8	7.4	2.3	1/20	1/4		
40	E47	E	土7・建3	※備考欄	土師質土器	皿		5.4			1/3		(注記：E056・080・094・095)
41	E42	E	建2検出面	E007・021	土師質土器	皿		6.1			1/4		
42	E58	E	南東	E125	土師質土器	皿		9.0			1/5		
43	E55	E	建4検出面	E003	土師質土器	皿		7.0			1/3		
44	E59	E	建2検出面	E007	土師質土器	皿	12.0			1/6			
45	E57	E	建2検出面	E007	土師質土器	皿	12.85	8.4	2.35	1/6	1/2		
46	E49	E	建3検出面	E036	土師質土器	皿	13.2	8.4	2.8	僅	3/8		
47	E51	E	建3検出面	E059	土師質土器	大型皿	19.8	10.2	3.6	1/9	1/8		
48	E5	E	土7	E052	陶器(大窯)	端反皿	9.45	4.9	2.25	3/4	完	灰釉	B類、印花文、全面施釉、削り込み高台、大窯1項、漆継ぎ
49	E12	E	建3検出面	E122	陶器(大窯)	端反皿	11.25	5.2	2.9	1/16	1/4	灰釉	B類、全面施釉、削り込み高台、大窯1項
50	E9	E	土7	E046	陶器(大窯)	端反皿	8.0	4.8	2.1	4/5	完	灰釉	A類、全面施釉、付高台、大窯1項、漆継ぎ
51	E3	E	土7	E048	陶器(大窯)	端反皿	8.4	4.8	2.15	1/2	完	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項
52	E4	E	建3検出面	E115・122	陶器(大窯)	端反皿	8.35	4.6	2.1	1/6	3/4	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項
53	E1	E	不明	E061	陶器(大窯)	端反皿	8.55	5.1	2.1	完	11/12	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項、漆継ぎ
54	E8	E	土7	E054	陶器(大窯)	端反皿	9.6	5.0	2.45	7/8	完	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、大窯1項
55	E7	E	土7	E055	陶器(大窯)	端反皿	11.2	6.6	2.32	完	完	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項
56	E6	E	建4検出面	E002・112	陶器(大窯)	端反皿	11.1	5.8	2.6	1/6	3/4	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、大窯1項
57	E19	E	土7	E045	陶器(大窯)	端反皿	11.1				1/3	灰釉	A類、大窯1項
58	E14	E	土7	E051	陶器(大窯)	端反皿		5.1			1/3	灰釉	A類、大窯1項
59	E16	E	不明	E017	陶器(大窯)	端反皿		4.9			1/6	灰釉	A類、全面施釉、付高台、大窯1項
60	E26	E	建3検出面	E029	陶器(大窯)	端反皿	6.65	4.0	2.0	1/3	完	灰釉	A類、全面施釉、付高台、大窯1項
61	E13	E	土4	E073	陶器(大窯)	端反皿		5.2			1/3	灰釉	A類、大窯1項
62	E27	E	建3	E050・095	陶器(大窯)	端反皿		4.25			2/3	灰釉	A類、大窯1項
63	E25	E	建4	E093	陶器(大窯)	端反皿		5.2			1/2	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項
64	E2	E	土7	E046・047	陶器(大窯)	端反皿	8.2	4.7	1.8	4/5	完	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項
65	E15	E	検出面	E113	陶器(大窯)	端反皿		6.0			1/4	灰釉	A類、全面施釉、付高台、大窯1項
66	E17	E	不明	不明	陶器(大窯)	端反皿		9.9			1/6	灰釉	A類、大窯1項
67	E11	E	建3検出面	E095・109	陶器(大窯)	端反皿	10.4	5.8	2.6	1/4	1/4	灰釉	A類、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項
68	E10	E	土7	E053	陶器(大窯)	端反皿	11.0	6.3	2.52	完	完	灰釉	A類、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項
69	追加2	E	建3	E081	陶器(大窯)	端反皿	10.0			1/5		灰釉	A類、大窯1項
70	E20	E	建3付近検出面	E026	陶器(大窯)	端反皿	10.0			1/6		灰釉	A類、大窯1項
71	E18	E	土7	E075	陶器(大窯)	端反皿	8.6			1/6		灰釉	A類、全面施釉、付高台、大窯1項
72	E22	E	土7	E117	陶器(大窯)	端反皿		6.4			1/2	灰釉	A類、全面施釉、付高台、外底輪トチン、大窯1項
73	E21	E	建3	E081	陶器(大窯)	端反皿		5.9			1/2	灰釉	A類、印花文、全面施釉、付高台、大窯1項
74	E23	E	建3	E095	陶器(大窯)	縁軸挟み皿					1/8	灰釉	外面露胎、大窯1
75	E24	E	建3	E095	陶器(大窯)	縁軸挟み皿					1/8	灰釉	外面露胎、大窯1
76	E31	E	建4検出面	E003	陶器(大窯)	天目茶碗		10.2			1/6	鉄釉	外面下半回転ヘラ削り
77	E30	E	検出面	E112	陶器(大窯)	天目茶碗		11.0			1/4	鉄釉	外面下半回転ヘラ削り
78	E29	E	土3 1	E067	陶器(大窯)	天目茶碗		11.2			1/6	鉄釉・錆釉	外面下半回転ヘラ削り・鉄化粧
79	E32	E	土3	E113	陶器(大窯)	天目茶碗		11.3			1/6	鉄釉	
80	E34	E	建2検出面	E035	陶器(大窯)	天目茶碗		4.0			完	鉄釉・錆釉	D類、削り出し輪高台、外底鉄化粧
81	E33	E	建4検出面	E010	陶器(大窯)	天目茶碗		4.3			完	鉄釉・錆釉	D類、削り出し輪高台、外底鉄化粧
82	E63	E	土7	E004・075	土師質土器	片口鉢	28.0			1/5			内耳質
83	E54	E	土7	E008	陶器(古瀬戸・大窯)	掃鉢		10.0			1/8	錆釉	古瀬戸後期IV新〜大窯1
84	E53	E	検出面	E113	陶器(古瀬戸・大窯)	掃鉢		9.1			1/8	錆釉	古瀬戸後期IV新〜大窯1
85	E28	E	建3検出面	E122	陶器(大窯)	蓋	2.6	1.1		完	完	灰釉	外面のみ施釉、大窯1〜2
86	E36	E	建3検出面	E122	青磁	碗					破	青磁釉	B4類、ヘラ状工具による細線文
87	追加10	E	検出面	E060・111・122	青磁	香炉	8.3			1/5		青磁釉	
88	追加9	E	土7	E006・115	青磁	盤					破	青磁釉	
89	E37	E	建3検出面	E122	青花	皿					破	呉須・透明釉	B1群
90	E40	E	検出面	E113	青花	皿		5.0			1/8	呉須・透明釉	B1群
91	E38	E	右列2	E016	青花	皿	7.9			1/10		呉須・透明釉	B1群
92	E39	E	検出面	E113	青花	皿		7.0			1/8	呉須・透明釉	B1群
93	追加7	E	検出面	E0104	青花	皿					破	呉須・透明釉	B1群
94	追加6	E	集石1	E0108	青花	皿					破	呉須・透明釉	B1群
95	追加8	E	検出面	E113	青花	碗					破	呉須・透明釉	C群
96	E41	E	建3	E095	青花	碗		5.3			僅	呉須・透明釉	D群
97	E62	E	土3・4 建2・3検出面	※備考欄	土師質土器	内耳鍋	31.8	26.8	17.0	1/4	1/4		B類、(注記：E023・028・034・037・041・070・096・113)
98	E61	E	土6	E024	土師質土器	内耳鍋	30.4	24.4	12.4	1/8	1/8		B類
99	E60	E	土3・4・6 建3検出面	E001・030・070	土師質土器	内耳鍋		22.4			3/4		

第1表 土器・陶磁器一覽表

番号	出土情報	地区	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考	番号	出土情報	地区	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
1	I.E区	A	釘	2.02	0.63	0.7	1.1	鉄		61	I.工覆土	A							欠番
2	I.F区	A	銅線				9.5	銅		62	I.工覆土	A	不明	1.59	0.68	0.64	0.9	鉄	
3	I.G区	A	不明	4.53	0.64	0.64	3.5	鉄		63	2.工WT	A	銭貨	2.56	2.56	0.14	2.8	銅	祥符通宝
4	I.G区	A	不明	7.14	0.82	0.65	7	鉄		64	2.工	A	不明	6.53	0.67	0.74	4	鉄	
5	I.G区	A	釘	13.33	1.33	1.16	15.7	鉄		65	3.工覆土								欠番
6	I.H区	A	不明	7.96	1.04	0.86	9.2	鉄		66	3.工覆土		イヌ釘?	9.71	2.19	2.54	66.2	鉄	
7	I.H区	A	不明	7.13	0.91	0.56	5.9	鉄		67	3.工覆土		釘	8.54	0.75	0.66	3.4	鉄	
8	I.J区	A	不明	12.28	0.71	0.84	15.1	鉄		68	3.工覆土アスファルト		不明	2.59	0.46	0.45	0.5	鉄	
9	I.J	A	不明	10.11	0.7	0.59	11.7	鉄		69	3.工覆土		不明	5.4	0.65	0.57	2.4	鉄	
10	I.J	A	不明	5.09	0.85	0.84	5.6	鉄		70	3.工覆土		不明	3.35	0.65	0.61	1.1	鉄	
11	I.K区	A							欠番	71	1・2.工確認南北T No1	A	不明	3.73	0.96	0.69	3.5	鉄	
12	I.工北T東部	A	不明	9.79	5.13	0.05	4.6	鉄		72	1・2.工確認南北T No2	A	不明	3.22	1.08	0.46	2.8	鉄	
13	I.工北T中央部覆土	A	不明	9.46	0.5	0.5	10.9	鉄		73	1・2.工覆土	A	取手部	10.4	10.2	4.7	164	鉄	
14	I.工T北東部上覆土	A	釘	12.21	1.02	1.04	9.9	鉄		74	A区確認T 2.工東側	A	不明	6.39	0.9	0.7	6.4	鉄	
15	I.工	A							欠番	75	9.工		不明	16.1	13.8	0.8	153.8	鉄	
16	I.工	A	釘	9.17	1.25	1.17	8.6	鉄		76	9.工東側面		不明	20.6	1.1	0.6	204	鉄	
17	I.工覆土	A	不明	3.89	2.42	0.13	1.6	鉄		77	9.工東側面		取手?	14.1	2.2	0.6	148	鉄	
18	I.工覆土	A	不明	5.26	0.76	0.72	2.5	鉄		78	9.工地表面		不明	38.1	3.4	0.2	46	鉄	
19	I.工覆土	A	釘	10.91	1.12	1.15	16.1	鉄		79	10.工土塁部		不明	26.1	5.8	4.9	3190	鉄	
20	I.工覆土	A	釘	6.15	0.93	0.74	3.5	鉄		80	10.工土塁部		不明	26.3	5.8	5.1	3375	鉄	
21	I.工覆土	A	釘	13.94	0.91	0.64	15.4	鉄		81	10.工		不明	7.1	5.2	0.4	140	鉄	
22	I.工覆土	A	釘	14.33	1.34	1.14	15	鉄		82	A区土層確認T2	A	釘	8.94	0.81	0.61	4.9	鉄	
23	I.工覆土	A	釘	8.49	0.61	0.61	4.4	鉄		83	A区土層確認T2	A	不明	3.77	1.62	0.87	6.7	鉄	
24	I.工覆土	A	釘	9.56	1.1	0.98	8.6	鉄		84	A区中央土層確認T	A	不明	3.68	0.85	0.79	2.5	鉄	
25	I.工覆土	A	釘	9.63	1.03	1.09	9.7	鉄		85	A区西張出部南T	A	不明	4.7	0.71	0.71	2	鉄	
26	I.工覆土	A	釘	8.62	0.81	0.75	5.3	鉄		86	A区耕作土中	A	容器	4.3	4.2	1.1	10	鉄	
27	I.工覆土	A	釘	7.54	0.98	0.59	6.5	鉄		87	A区耕作土中	A	クマデ	11.72	3.06	0.59	47.5	鉄	
28	I.工覆土	A	釘	6.54	1.11	1.12	5.8	鉄		88	A区耕作土中	A	不明	6.67	1.53	1.55	7.7	鉄	
29	I.工覆土	A	不明	5.85	0.65	0.58	2.8	鉄		89	A区耕作土中	A	不明					鉄	
30	I.工覆土	A	釘	6.07	0.85	0.76	2.8	鉄		90	A区耕作土中	A	釘	9.15	0.86	0.79	5.2	鉄	
31	I.工覆土	A	不明	5.85	0.58	0.51	4.3	鉄		91	A区耕作土中	A	釘	8.34	0.95	0.7	4.3	鉄	
32	I.工覆土	A	釘	4.98	1.63	1.07	1.6	鉄		92	A区耕作土中	A	不明	5.9	0.55	0.56	3.1	鉄	
33	I.工覆土	A	釘	5.07	0.76	0.76	2.4	鉄		93	A区耕作土中	A	釘	7.25	0.7	0.65	3.9	鉄	
34	I.工覆土	A	不明	5.71	0.43	0.43	2.4	鉄		94	A区耕作土中	A							欠番
35	I.工覆土	A	釘	4.52	1.26	1.05	10.9	鉄		95	B区検出面No2	B	銭貨	2.42	2.37	0.1	1.9	銅	熙寧元宝
36	I.工覆土	A	不明	4.66	0.76	0.72	2.2	鉄		96	B区検出面	B	不明	8.44	0.95	0.89	15	鉄	
37	I.工覆土	A	不明	4.04	0.64	0.65	2.4	鉄		97	E区建3 No2	E	不明	8.64	2.38	0.92	16.6	鉄	
38	I.工覆土	A	不明	2.67	0.69	0.59	0.8	鉄		98	E区建3 No2	E	銭貨	2.32	2.32	0.11	1.8	銅	元豊通宝
39	I.工覆土	A	釘	2.76	0.61	0.65	0.9	鉄		99	E区T3	E	不明	11.86	1.83	0.54	20.8	鉄	
40	I.工覆土	A							欠番	100	半地下工場覆土		ナット	3.55	3.6	2.4	94.4	鉄	
41	I.工覆土	A	不明	3.35	0.62	0.62	1.5	鉄		101	9.工(または8.工)表探		ヌイ釘?	16.9	2.12	1.38	143	鉄	
42	I.工覆土	A	不明	2.57	0.51	0.51	0.9	鉄		102	16-1		不明	3.15	0.73	0.62	2.1	鉄	
43	I.工覆土	A	不明	5.31	1.02	0.81	4.8	鉄		103	16-2		釘	4.12	0.77	0.74	2.4	鉄	
44	I.工覆土	A							欠番	104	16-3		釘	2.78	0.81	0.72	2.1	鉄	
45	I.工覆土	A	不明	2.24	0.46	0.47	0.5	鉄		105	1-1		不明	2.37	0.56	0.55	0.6	鉄	
46	I.工覆土	A							欠番	106	6-1		不明	3.42	0.77	0.71	1.9	鉄	
47	I.工覆土	A							欠番	107	10-1		不明	3.12	0.87	0.62	2.1	鉄	
48	I.工覆土	A	不明	0.99	0.56	0.5	0.4	鉄		108	74-1		不明	2.66	0.74	0.51	0.9	鉄	
49	I.工覆土	A	釘	2.47	0.81	0.79	1.4	鉄		109	82-1		釘	6.6	0.7	0.75	4.1	鉄	
50	I.工覆土	A	不明	1.33	0.78	0.66	0.9	鉄		110	No1(E区検、南東部)	E	弾丸	1.22	1.18	1.2	9.8	鉛	球状
51	I.工覆土	A	不明	1.52	0.41	0.37	0.2	鉄		111	E区(南東部)No2	E	釘	3.68	0.66	0.7	2.3	鉄	
52	I.工覆土	A							欠番	112	E区(北東部)No6	E	弾丸	1.31	1.25	1.25	10.7	鉛	球状
53	I.工覆土	A							欠番	113	E区No31	E	銭貨	2.48	2.48	0.13	2.3	銅	永楽通宝
54	I.工覆土	A	釘	3.01	1.08	0.89	2.7	鉄		114	E区No41	E	銭貨	2.32	2.31	0.13	2.8	銅	嘉祐元宝
55	I.工覆土	A							欠番	115	南東部建3-T2内No62	E	銭貨	2.37	2.34	0.1	1.3	銅	開元通宝
56	I.工覆土	A	釘	0.8	0.6	0.42	0.5	鉄		116	E区No87	E	銭貨	2.41	2.39	0.09	1.3	銅	皇宋通宝
57	I.工覆土	A							欠番	117	E区検(北東部)	E	銭貨	2.47	2.37	0.1	1.1	銅	熙寧元宝
58	I.工覆土	A	釘	1.19	0.62	0.56	0.3	鉄		118	E区北西、石列南側	E	釘	3.51	0.51	0.48	1	鉄	
59	I.工覆土	A	釘	1.79	0.4	0.41	0.3	鉄		119	E区検(南東部)	E	刀子	3.89	1.18	0.67	4	鉄	
60	I.工覆土	A	不明	2.69	0.61	0.59	1.2	鉄		120	E区南東部検	E	釘	4.17	0.9	0.64	2.7	鉄	

第2表 金属製品一覧表

第3節 近代の遺構・遺物

1 調査の進め方

『松本市における戦時下軍事工場の外国人労働実態調査報告書』(以下「実態調査報告書」という。)の122・123頁に掲載された「図3 半地下工場計画図」(以下「計画図」という。第20図)に記載されている半地下工場の計画位置に従って確認を実施した。調査対象地内には12基の計画位置が記されていたが、現況地形の凹凸から事前の位置推定が可能であったものは少なく、大半は埋め戻された平坦地で地表からの判別が不可能であった。そこでトレンチ、表土除去などの方法によって位置の把握を試みた。把握後の扱いは、工事により煙滅の恐れのある1～3号工場跡については面的調査、地表に露出しており工事ではそのまま埋設保存される8～10号工場跡については現況測量、その他の工場跡は基本的に埋設保存となるため位置の確認、という方針で調査を進めた。

2 遺構

(1) 第1号工場跡(区割図:第10図、平面図:第22図)

A地区に位置する。現況がブドウ園であったため地表面からの確認は困難で、確認トレンチ(1・2工確認T)により概ねの規模を確認した上で掘り下げを行った。その結果、計画図に記されたものと位置的に合致した。

平面規模は上部で幅10m、奥行き長さ23mで、底面は幅8.5m、奥行き21mを測る。壁は北及び東壁がやや緩い斜面で、南壁はほぼ垂直に掘り込まれる。開口部は西側であったとみられ、一部はスロープ状になっている。

底面は、開口部から向かって左側半分が一段高くなっており、全面に礫が敷き詰められている。段の縁には大きめの礫が並べてある。向かって右側半分は、奥部が一部礫敷となっているが手前側に礫はない。右側部分の底面付近を一部精査したところ、土間状になっており、側壁際近くでは確認できた範囲で幅30cm、深さ15cmの溝が掘られているが、内側は散乱するアスファルトルーフィングが重なり、不明瞭であった。床面では2個のピットを検出した。うち一つは底部が二段になっており柱痕の可能性もある。

1工の覆土は何層かに分かれた人為埋没の状況を呈した。すべて戦後の埋め戻しによるもので、地元の情報によれば人力で埋めたということであり、少しずつ埋め戻していった様子が窺われる。

本址に伴う遺物は近代及び近代以降のもので、光学機器のレンズフィルター、電線の一部、真空管片などの単体遺物と工場の建築部材・屋根材がみられた。その他、ウシ・ヤギなどの動物骨が出土している。また土師質土器皿・陶器等、中世に属する遺物が混入していた。

本址は、床面の状況及び出土遺物から判断して、終戦時においては上屋が完成していたと考えられる。

(2) 第2号工場跡(区割図:第10図)

計画図ではA区の1工の隣に位置する。現況がブドウ園であるため地表面からの確認は困難であり、4本のトレンチ(1・2工確認T、2工南北T、A区確認T1、同T2)を設定して確認を試みたが、トレンチ断面からは工場跡としての掘り方は把握できなかった。出土遺物は近代以降のものはほとんどみられず、中世の土師質土器内耳鍋などがみられた。計画はされたが造られなかったか、工事中断後、すぐに埋め戻された可能性も考えられる。トレンチ断面で見られた土層や土質は、むしろ中世の盛り土の地形に似ていた。

(3) 第3号工場跡(区割図:第10図)

計画図ではA区の南、C区の北にあたる。現況は水田及び荒地で、荒地部分の地表面は凹地となっており、工場跡の痕跡が明瞭であった。視認できた規模は上部で幅10m、奥行き13m、底面で幅6m、奥行き10mを測る。底面には耕作の際に不要な礫が投げ込まれていた。開口部は西側にある。工場跡前方の畑地は、従前は水田であったものが、工事にあたり埋められたものと考えられる。

当初はこの凹地部分が工場跡の全体であると考えて現況測量を実施した。しかし、地元の方から、この工場

跡はもう少し大きく、埋め戻す際に完全に埋めきれなかった部分が凹地となっているという情報を得たため、奥の水田部分に5本の範囲確認トレンチ(T6～8、3工南確認T、3工北確認T)を入れたところ屋根材が多量に出土し、本址の範囲を確認することができた。その結果、規模については、幅は目視の通りであるが、奥行きは上部で18m、底面では17mを測るとみられる。計画図と比較すると、若干南にずれて建設されている。面的な掘り下げを行っていないので床面などの詳細は不明であるが、本址は掘り方がほぼ完成されていることと、屋根材が出土したことから、終戦時にはほぼ完成した状態の工場であったと考えられる。埋め残った部分が凹地として現在まで残ったものとみられる。

(4) 第4号工場跡

計画図によれば1～3工の南に位置する。現況は水田である。事前に行った試掘調査の結果、建築材とみられる木材が確認され、ほぼ計画図通りの位置に作られていたことは把握できていたが、今回は詳細な調査ができず、規模、方向などは不明である。

(5) 第5号工場跡(区割図:第8図、現況測量図:第23図)

調査地東部、D区北東隣で確認した。現況は水田跡とみられる湿地である。8工前面から続く平坦面の北西端に不自然な方形の落ち込みを確認したため、これを5工として捉えた。しかし測量のみにとどまり、掘り下げを行っていないため、断定はできなかった。本址は計画図に記された計画位置と実際の位置が異なっている。現況での規模は上部で幅9.5m、奥行き9.8m、底面で幅6m、奥行き8.5mを測る。

(6) 第6号工場跡(区割図:第8図、現況測量図:第23図)

開発区域中央部、D区内で確認した。現況は水田である。完全に埋め戻されているため地表面からの観察ではまったく確認できない。耕作土及び基盤土を除去したところ、近世以前に遡る整地層とみられる造成土に掘り込まれた工場跡が検出され、その範囲一帯に屋根材として用いられたアスファルトルーフィング片が散布していた。計画図とほぼ同じ位置であった。

規模は上部で幅11m、奥行25m、底面の幅は10.5mで、奥行きは23m前後とみられ、平面形は長方形である。開口部は北西であったとみられるが、現在は水田の畦畔で埋められており、トレンチによる構造確認では明確にできなかった。設定した4本のトレンチ(6工AT、同BT、同T3、同T4)のうちのT3と、直交するT4から工場の構造材とみられる木材が出土した。確認された構造材は、柱、壁材及び屋根部分の基部で、いずれも外側にあたる面にはアスファルトルーフィングが貼られていた。壁とみられる板材は厚さ2cm前後のマツ材で、一部が残存するのみである。柱は原位置で12本を確認した。いずれも径20cm前後、長さ150cm前後のマツ材の丸太で、掘り方床面に70cmほど頭が出る形で、50cm間隔で打ち込まれ、確認できたものでは深さは地中80cm前後まで達している。柱上面は、屋根基部の受けとなり、10cmの切り込みが入る。屋根基部は18cm角のマツ材で、上面に50cm間隔で10cm×2cmの切り込みが入り、それが屋根材の受けになっていたと考えられる。屋根の構造材は出土していない。工場底面は粗掘りをした後に粘土を敷いていたようである。壁の内側55cmのところ、幅26cmの板を2枚合わせたV字型の幅30cmの溝状の木組みが確認された。用途については明らかではないが、形状から工場内の側溝的な目的であったと考えられる。

遺物は底面に大小さまざまな木材が散乱していた。一部には釘がついたままのものもあった。また、前述のとおり検出面には、屋根材が多量に散乱している。

本址は終戦時にほぼ完成していたものとみられる。埋め戻しにあたっては、工場上部の構造物のみを撤去し、水田基盤土を敷くのにレベル的に支障のない柱などは、そのまま埋め戻されたと推定する。

(7) 第7号工場跡(区割図:第8図)

B区の南西隣、D区の南に位置する。現況はブドウ園であったが、地表面には凹凸が明瞭に残っており、工場跡の存在や規模の推定は容易であった。開口部は西であったとみられるが、現況の用水路があり調査できなかった。計画図と比較するとほぼ同じ位置であった。

4本のトレンチ(7工WT、同ST、同ET、同NT)で確認した規模は上部で幅10m、奥行き16mの長方形、床面

で幅8.5m、奥行き14.5mの長方形とみられる。底面は一部が粘土敷きで、その他は礫が敷き詰められている。本址の両側には構造材が埋没している。全容については不明であるが、6工と同様の造作が行われている。本址前面の細長い畑地は、トレンチでは人為的に埋められた土層を確認したが、地元の情報によれば工場を掘り下げた土を盛ったものとのことである。

(8) 第8号工場跡(区割図:第7図、現況測量図:第23図)

調査区東部の山際に3基並ぶうちの北側に位置する。現況は荒地(山林)である。林城山の南東斜面を切り崩して造成されており、掘り方が残存している。

規模は現況で、上部が幅11m、奥行き15mの不整長方形を呈し、底部は幅5m、奥行11mの不整長方形である。底部には一部に礫が敷き詰められているが平坦ではない。本址は掘り方、床面とも不整な長方形で、壁も南隣に続く9・10工のように法面処理が行われず不明瞭である。また前面に径5m、高さ0.8 m程の土山があることから、工事未了のままであった可能性がある。

(9) 第9号工場跡(区割図:第7図、現況測量図:第23図)

調査区東部の山際に3基並ぶうちの中央に位置する。現況は荒地(山林)である。立地は8工と同じく林城山の南東斜面を切り崩して造成されており、掘り方が残存する。平面形は最大で長辺(南東壁)は27m、奥壁(北東壁)は14mの長方形を呈する。深さは東側隅の最も深い部分で4m掘り込んでいる。底面は長軸19m×短軸10mの長方形である。南東壁際には、幅2m×18mの礫を敷き詰めた範囲が存在するが、用途は不明である。壁は山の斜面を直接削ったもので、崩落防止のため法面処理をした痕跡がある。底面には礫範囲以外には構造物は残存しない。工場前面は掘り出した土砂によって埋め立てられて、8工前より一段高い平坦面が造成されたと推定する。本址は戦後、埋め戻されることなくそのまま放置されていたらしく、一部の土手が切られている以外は残存状況が良好で、造成時の状況を最もよく残していると考えられる。

(10) 第10号工場跡(区割図:第7図、現況測量図:第23図)

調査区東部の山際に3基並ぶうちの南側に位置する。現況は荒地であるが、戦後、花火業者が火薬庫用地として使用しており、工場跡内の平坦地にコンクリート製の倉庫が建てられている。林城山の南東斜面を切り崩して造成されており、掘り方が残存する。平面形は最大で長辺(北壁)は25m、奥壁(東壁)は14mの長方形を呈する。深さは北東側隅の最も深い部分で4.8m掘り込んでいる。現状での床面は長軸6m×短軸5mの長方形だが、本址の前面に土手があるため開口部が非常に小さくなっている。この土手と南壁の土手とは不連続であることから、火薬庫を設置する際に爆風除けとして築かれた可能性がある。したがって実際の底面は推定で長軸18m、短軸8m前後だったとみられ、他の工場跡と同様に本来の前面は開けていたものと思われる。壁は山の斜面を直接削ったもので、崩落防止のため法面処理をした痕跡がある。底面は火薬庫を設置する際に攪乱されている。前面は緩斜面であり、北側は9工前面と接している。

(11) 第11号工場跡

計画図によれば本址は12工北西側に隣接している。しかし今回の調査では当該位置から遺構を確認することはできなかった。場所は異なるが9工南西側前面の水田に不自然な方形の窪みがあるため、そこが11工であった可能性もあるが、調査できなかったため不明である。

(12) 第12号工場跡(区割図:第6図)

E区西方に位置し、現況はブドウ園となっている。地元の情報によればE地区北西辺下方の土手のうち、南側半分が工場建設の際に直線状に削られたということである。土手の一部に抉れている部分があるため、それが工場跡の東隅であったと考えられる。本址全体の構造などは明らかにはできなかったが、6本のトレンチ(12工T1~6)調査では底部に粘土を敷いた面が一部で認められ、少なくとも工場としての整地が行われたとみられる。遺物に屋根材などがまったくみられないことから、掘削と床面整地工事のみが行われ、屋根を載せるには至らなかった未完成の工場跡である可能性がある。本址の前面に大嵩崎沢に迫る土手状の堆積があるが、地元の証言によれば土手を削りだした土を盛ったものという。

(13) 工場跡以外の遺構

計画図によれば、調査区域内には半地下工場跡以外にエアーコンプレッサー、新設道路が予定されていた。今回の調査では、3工前の畑地(区割図:第10図)が北側の林山腰遺跡A区前面から続く石垣を埋めて造られたことが判明し、この畑地は、元来水田であったものを道路築造のため埋めたものである可能性が高まった。その他、6工の上の8工前面平坦地、5～7工前面の平坦面(区割図:第8図)なども、道路として利用する予定地であった可能性がある。エアーコンプレッサー基礎については確認できていない。

6工北側には、並行する2条の弧状を呈する土手がある(区割図:第8図)。調査区内で確認された残存長は35mである。北側は調査区外へ続いており、更に延びている。それより先は藪となり、土手が続くかどうか確認できなかったが、さらに先の林城山斜面にはトロッコ軌道とされる帯郭状の細長い平坦地が続いている。反対側の南側は畑地となっていたため確認することはできない。土手の幅は2条ともほぼ同様に上面が50cm前後、下面が80cm前後、高さは15cm前後でほぼ一定している。土手内側の間隔は60～100cmである。用途については明らかではないが、その間隔及び土手の高さなどから考えると、現在鉱山などで使用されているものと同規格のトロッコの軌道敷である可能性がある。

3 遺物

半地下工場に直接関連する遺物は全体的に少なかった。1工などでは中世の遺物が主体を占め、それらに混じって近代の遺物がみられる状況であった。遺物の内容は、工場建物の構造材と思われるものと、埋土内に含まれていた単体遺物に区分できる。

(1) 構造材

柱・壁材 6・7工においてみられた。いずれも松材をつかったものである。大規模にトレンチを入れて調査を実施した6工では、①柱材、②壁材、③屋根の基部、④側溝状板材がみられた。

①柱材は12本を確認した。長さは150cmで、先端部は杭状に打ち込むために尖っている。頭部は平らに加工してあり、さらに③壁材を載せる受けとなる10cm×2cmの切り込みが内側にある。側面には屋根材と同様のアスファルトルーフィングを貼り付けていた。マツ材である。

②壁材は長さ15mに亘って残存を確認した。個々の材は厚さ2cm、最も長いもので長さ350cm×幅30cmの板材で、外側に屋根材と同様のアスファルトルーフィングを貼り付けている。釘で柱に固定して壁としていたようである。マツ材である。

③屋根の基部は残存部分で長さ990cmを確認した。18cmの角材で、上面には50cm間隔で屋根材を受ける溝として幅10cm×深さ2cmの切り込みが入っている。

④側溝状板材は確認トレンチ3内において80cmを確認したのみである。形状より側溝の構築材と考えたが、工場内側の底面に側溝としてどこまで続くのかは不明である。

屋根材 1・3・6・7工から多量に出土した灰褐色から黒褐色を呈す厚紙状の物質で、すべて破片で大きさや厚さは様々であった。実態調査報告書の記載にみられる、屋根に載せる黒い紙に雲母を貼り付けたもの(注1)と推定される。多くの工場跡において覆土中に多く含まれていた。完成された屋根の上に載せられていたものが、工場を取り壊した際に散乱したとみられる。これらは現在の工業製品であるアスファルトルーフィング(注2)の原型的なものと考えられる。

その他の木材 6工においてトレンチ調査で底面全体から木片が出土した。その多くは釘が刺さったままの状態であることから、半地下工場を取り壊した際に投棄された構築材の一部である可能性がある。大きさ、形状が一定ではなく、用途についてわかるものはなかった。

釘 6工出土の構造材に付属した形でみられた。すべて丸釘である。

(2) 単体遺物

光学機器フィルター 1工覆土中から出土した。直径40mmの金属枠に黄色いガラスをはめ込んだもので、カメラ

ラなどに用いられたフィルターと考えられる。戦時中のものと思われる。

電線断片 1工覆土中から出土した。撚った6本の銅線の周囲に紙、ゴム、布の順に被覆された構造であるが、劣化が激しく布はほとんど残存していない。残存長は10cmを測る。直径は0.2cmとみられる。被覆がある銅の撚り線で、硬銅線(硬く曲げにくい銅線)であることから、高圧電線から変圧器により分配された後の低圧電線用と考えられる。半地下工場内での工作機械作業のために配線された低圧電線の一部である可能性がある。

碍子片 1工覆土中から電線用の碍子とみられる小破片が2点出土している。

ガラス製品破片 1工中央部から出土した。真空管か白熱電球のヒューズ部分とみられる筒形のガラス製品片である。直径1.1cm、全体の残存長3.1cm、管部の残存長2.0cmを測る。

釘 構造材に伴ったもののほか単体の釘も出土した。いずれも腐食が激しく、戦時中のものか、戦後の埋め戻しの際に混入したものか判別できなかった。

動物骨 1・3工からは、多くの動物骨が出土している。特に1工の覆土中から多く見つかり、主に北側の礫敷き部分の底面から出土した。ウシ・ウマ・ヤギの骨とみられる。ウシ・ウマについてはほとんどが小破片であったが、ヤギは幼獣の骨がほぼ一頭分まとまっていた。

注1:文獻1-P159、3行目「黒い雲母のついたコルタ式のあの厚いかみ」、5行目「黒い雲母をちらばれたものを屋根に乗せ」、13・14行目「屋根は厚い紙でね、そこへ雲母を張りつけたっていかね」

注2:建物屋根の瓦の下に貼る防水のための屋根下葺材で、現在のものはアスファルトを含浸させた原紙の上に被覆用アスファルトをコーティングし、その上に鉱物質粉粒を貼っている。さらに不織布を貼るなどして強度を増すように改良されたものもある。6工出土品のサンプルを田島ルーフィング株式会社(東京都千代田区、アスファルトルーフィング製造・販売業)に分析していただいたところ、基材となる厚さ0.8mmのラグ原紙(有機天然繊維を主体とした原紙)にストレートアスファルト(原油を常圧蒸留-減圧蒸留し、L P G、ナフサ、ガソリン、灯油、軽油、潤滑油、重油などの成分をとった最後の残渣として得られるもの)を含浸(塗布)し、表裏面に雲母片を付着させたものであることが判明した。また、戦前のカタログには飛行機格納庫などの屋根材として用いられているとの記載があることもご教示いただいた。

No.	現況 残存状況	調査方法	規 模				内部構造	出土遺物	備 考
			長さ	幅	深さ	面積			
1	ブドウ園 完全埋め戻し	発掘調査	21.0	8.5	0.8~ 1.0	178.5	側溝、ピット	屋根材(アスファルトルーフィング、板)、光学フィルター、碍子、真空管、電線片	内部から出土した大量の礫は埋め戻しの際に投げ込まれたものと推定
2	ブドウ園 完全埋め戻し	確認調査	-	-	-	-	-	-	トレンチでは半地下工場跡である確証は得られなかった。確認された土層は中世の盛土地形に似る。
3	水田・荒地 一部埋め戻し	現況測量	8.9	7.0	1.3	(28.9)	-	屋根材(アスファルトルーフィング)	前面部分が一部窪地として残存
4	水田 完全埋め戻し	事前の試掘	-	-	-	-	-	-	事前の試掘のみで詳細は不明
5	荒地・水田 一部埋め戻し	現況測量	7.0	9.0	1.0	(50.3)	-	-	現況より半地下工場跡と考えたが詳細は不明
6	水田 完全埋め戻し	確認調査	(25)	11.0	0.5	(192.1)	側柱、壁材 粘土敷床一部 木樋	屋根材(アスファルトルーフィング、板)、木片、鉄釘、柱材	トレンチで基底部の構造を確認。壁柱は長さ140cmを測る。内部には木材が散乱し、埋め戻す際に投げ入れられたと推定。底面には礫が敷き詰められる。
7	ブドウ園 一部埋め戻し	確認調査	-	14.6	0.9	-	側柱、壁材 粘土敷床一部 石敷床一部	屋根材(アスファルトルーフィング、板)木片、鉄釘、柱材	トレンチで屋根の基部を確認。床面は粘土が敷き詰められる
8	山林 掘り方残存	現況測量	9.6	4.0	1.8	(35.6)	石敷床一部	不明鉄製品	未完成の工場跡と推定。前面に土山が残る。
9	山林 掘り方残存	現況測量	18.0	10.0	5.8	(177.9)	石敷床一部	不明鉄製品	工場跡の掘り方が完存
10	山林・建物 掘り方残存	現況測量	5.0	7.0	4.8	(86.7)	-	-	戦後に火薬庫が設置されており、開口部前の土塁はその際に設けられたと推定
11	ブドウ園 不明	確認調査	-	-	-	-	-	-	遺構の確認はできなかった
12	ブドウ園 一部埋め戻し	確認調査	-	-	-	-	-	-	底面に粘土が見られた。造成途中の工場跡と推定。南東の土手は工事に伴うもの。

第3表 半地下工場 遺構一覧表

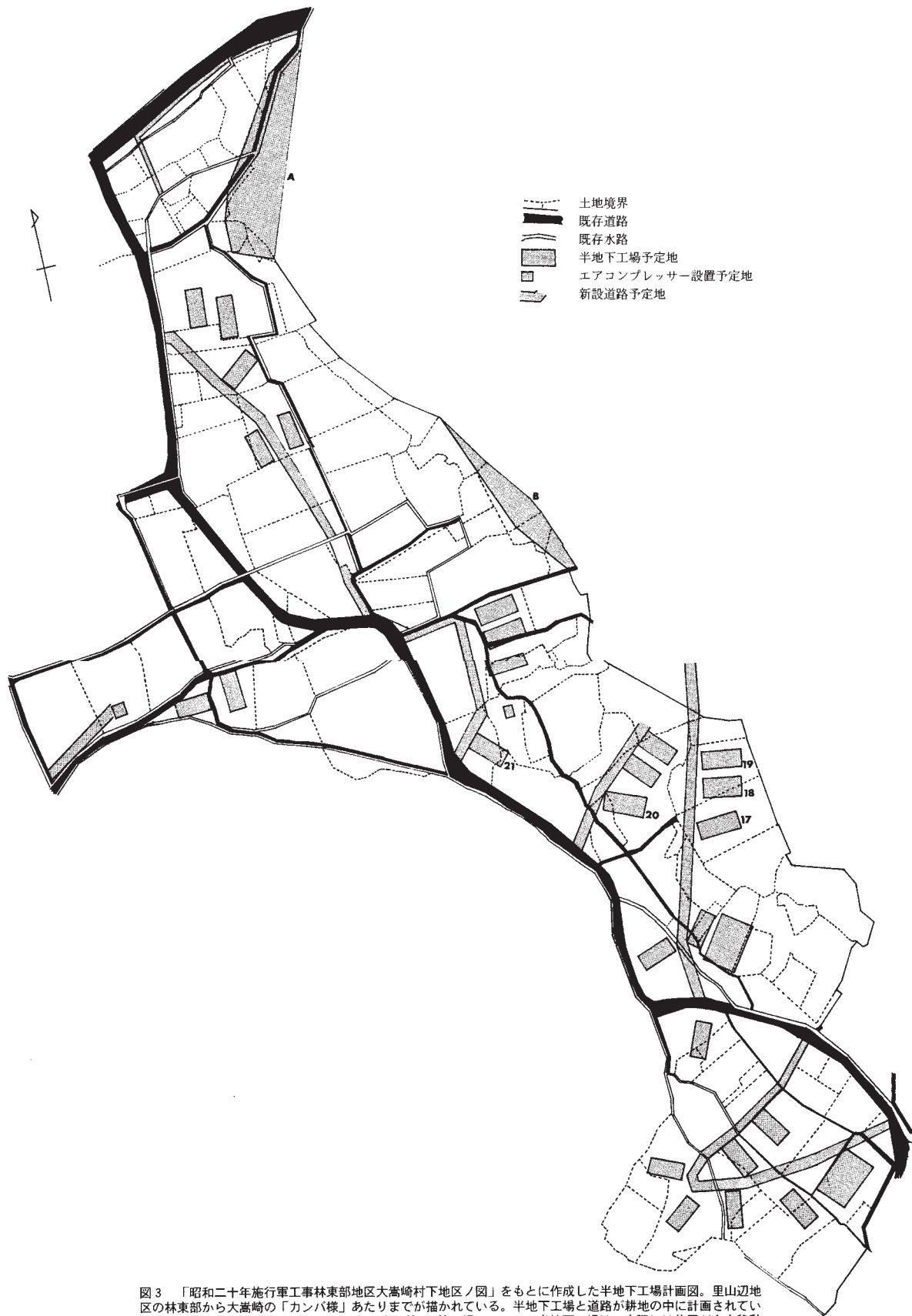


図3 「昭和二十年施行軍工事林東部地区大嵩崎村下地区ノ図」をもとに作成した半地下工場計画図。里山辺地区の林東部から大嵩崎の「カンバ様」あたりまでが描かれている。半地下工場と道路が耕地の中に計画されているようすがよくわかる。図中のA.Bはズリ（土砂）の捨て場。17～21の半地下工場は、実際には位置が多少移動して造られている（図2参照）。上方が林東部で右下方が大嵩崎方面。

第20図 労働実態調査報告書122・123頁 図3転載（縮尺不同）



第 21 図 半地下工場計画位置と現況地形・調査範囲



第 22 図 第 1 号半地下工場跡



第 23 図 第 5・6・8～10 号半地下工場跡 現況地形測量図

第4章 調査のまとめ

1 中世の遺構・遺物

今回の調査地一帯は小笠原氏の居城とされる林城に隣接する部分であることから、中世に関連する遺構・遺物が発見される可能性が高い場所であった。トレンチによる試掘と確認調査という限られた範囲では、遺物の分布が希薄である中世の遺跡や遺構を発見することはかなり困難で、主な成果は面的な調査ができたE区に集中している。

E区では礎石と推定できる大型平板な川原石が多数発見された。これらの礎石は重いものでは60kgを超える。礎石の配列から4棟から6棟程度の礎石建物が存在していた可能性を想定した。これらはすべて梁や桁の軸方向が近似しており、おそらく時間的には一連の範囲の中に収まる可能性がある。5条の石列もこれらの建物と同じ方向軸なので、おそらく付随する一連の施設であったのだろう。礎石間の旧地表と想定できる面には白色粘土を薄く貼った層が広がっており、その面上に土器・陶磁器片や木材小片、炭化物が散布していた。また、建物のエリア内と思われる中に掘られた浅い窪み程度の土坑からは焼土や炭化物を伴って陶磁器がまとめて出土した。

E区から出土した土器や陶磁器は15世紀後半から16世紀初頭に属するもので、時期的なまとまりが窺える。この他、B・C地区からも同時期の土器・陶磁器が出土している。このため、今回の調査地内で検出された中世に属すると考えられる各遺構の時期もそこに求めたい。

2 棚田状地形

本文中では詳細に触れられなかったが、今回の調査地一帯は、全面的に棚田ともいえる小規模水田が段をなして連なる、明らかに人為的に造成された段状地形を呈していた。調査に入る前は、この段状地形は近世以降の水田や畑地の造成に伴って形成されたものと考えていたため、確認調査の対象として重点を置いていなかった。しかし、各所で確認のトレンチ調査を進めるにしたがって、散発的に発見される中世の遺構・遺物とともに、半地下工場建設による破壊を免れた地点のいくつかでは盛り土や硬化面などの整地の痕跡が認められ、そのいずれもが近世以降の地業と特定する証拠は得られなかった。これは現在まで残る段状地形の形成が中世まで遡る可能性を示唆するものとも言える。ただし、段状地形は今回の調査地の外にも続いており、このような広範囲に及ぶものを一律に中世の所産と認定するには、現状ではあまりにデータは少ない。本遺跡を取り巻く歴史的状況を考察し、当時の政治・経済や技術面からの慎重な検討を経ることが必要となろう。

3 近代の遺構と遺物

実態調査報告書にまとめられた半地下工場跡について、調査地内に想定されていた12基のうち10基を確認することができた。位置については、計画図の記載通りのものと、若干のずれがあるものがあった。内部構造は6基の工場跡で、床面に礫を敷く(1・7・8・9工)、床面に粘土を敷く(1・6・7工)、壁際に側溝を有する(1・6工)などの特徴が把握できた。また建築材と推定できる遺物が出土し、構造材や屋根材の状況から、建築工事の進捗状況や施設廃棄後の様子を言及できたものもあった。建築材ではないと推定される単体遺物はきわめて少なく、しかも半地下工場に建設に伴うものか、廃棄後の埋め戻し等に伴うものなのか判別はできなかった。遺物の中で特徴的なものとしてアスファルトルーフィングがあり、これについては専門的なご教示をいただいて、実態調査報告書に記録された屋根材に相当するものと特定できた。

4 調査全体について

第1章で述べたとおり、通常の緊急発掘とはかなり異なった枠組みで始まった調査であったが、多大な成果を上げることができた。しかし、中世の盛り土や造成を伴う遺跡の発掘や、近代遺構の確認などは、従来から手

掛けている原始・古代の集落遺跡等の調査手法とは大きな違いがあり、調査の最中は試行錯誤の連続であった。膨大な量の平面図・断面図などを作成したが、それらが果たして的確を射たものであったか、遺跡・遺構の特徴を端的に捉えるものであったか、今もって疑問が残る。しかも、報告書作成期間の制約から、掲載する図類や記述をかなり要約せざるを得なかった。この点については調査関係者を代表して、お詫びを申し上げたい。

最後になりましたが、本調査の前段から終了まで、里山辺地区林・大嵩崎両町会、薄川土地改良区をはじめとする地元関係者の皆様からはご理解と多大なご協力を賜りました。深甚なる感謝の意を表するものです。また、調査や本書の作成にあたってご指導、ご教示を賜った皆様にも大いなる敬意を表し、結びといたします。



調査地の北半分と林集落、松本市街地を望む(南東方向の上空から撮影)
写真下半分が調査地で、上からA、C、D、B区。右側の樹木が茂る山地は林城山(林大城)。上半の左右に横切る土手は薄川。

写真図版 1 林山腰遺跡第 2 次調査地全景写真(1)



調査地全景と遺跡の立地状況(北西方向の上空から撮影)
写真中央部がA～D区。奥の人家は大高崎集落。左の山が林城山(林大城)、右が林小城。両城間の谷に遺跡が広がる。

写真図版 2 林山腰遺跡第 2 次調査地全景写真(2)



A～D区全景(ほぼ垂直の上空から撮影)
 写真上側が南西。右半の大きな方形の調査地がA区。中央の斜めに細長い調査地がC区。左寄りの台形の調査地がD区。



B・D区、第5・8・9・10号半地下工場跡全景(北西の上空から撮影)
 写真下側の台形の調査地がD区。その右上のブルーシートがB区。中央の草木を除去した起伏のある一帯が左から5・8・9・10工跡。

写真図版3 A～D区航空写真



A区全景(ほぼ垂直の上空から撮影)
写真上側がほぼ北西。左上の大きな長方形の掘り込みが1工。左下の草が生えている範囲とその右に隣接するトレンチが3工。



第1号半地下工場跡全景(ほぼ垂直の上空から撮影)
写真上側がほぼ北西。1工は長辺23m、短辺10m、深さは1m前後という規模で、入口は西側(写真の左側)と推定。

写真図版4 A区航空写真



A区西面を区画する石垣(西側から撮影す)
下段の石の積み方が上段とは異なっている



A区外 T12の敷石状遺構
こぶし大の角礫を敷き詰める



A区外 T11の暗渠状遺構
両側に石を並べ蓋石が載る



B区全景(南東から撮影)



C区建1(北側から撮影)
礎石とみられる平石が長方形に並ぶ



C区東Tで確認された硬化面

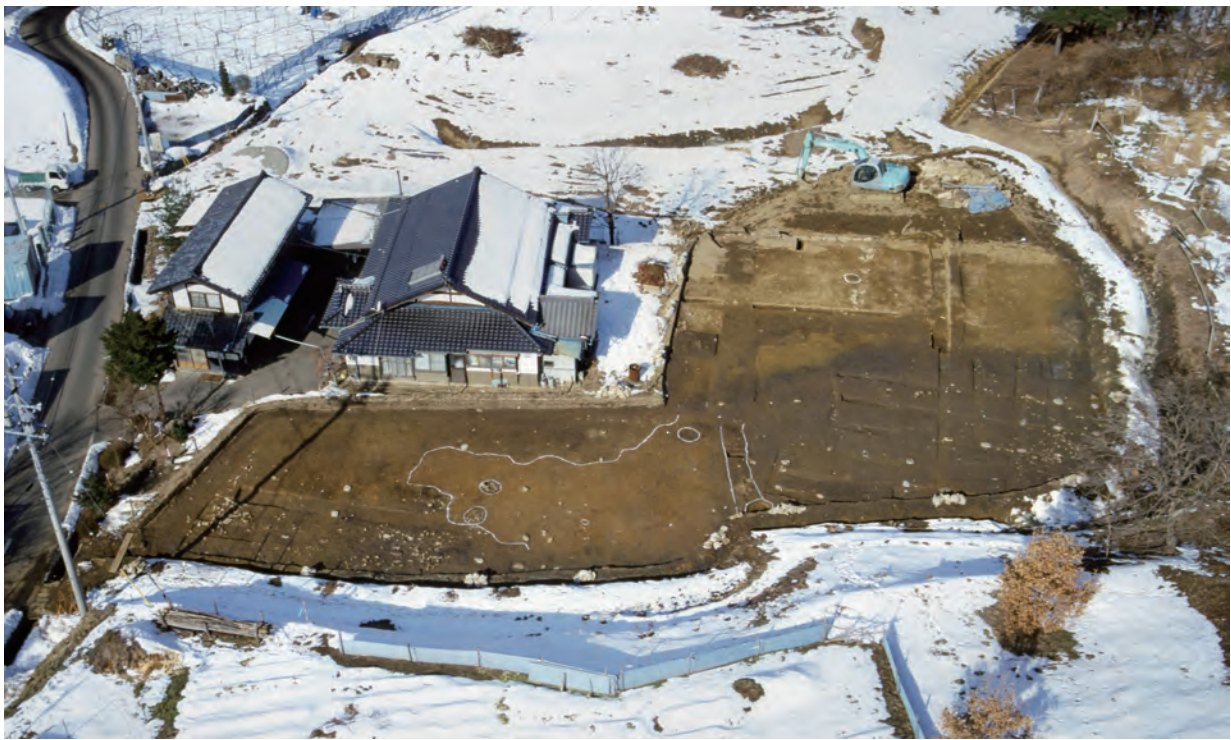


A～D区一帯の調査前の状況
棚田状地形が認められる



D区全景(北側から撮影)
手前は6エトレンチ

写真図版5 A～D区の遺構



E区全景(南東方向の上空から撮影)



E区全景(ほぼ垂直の上空から撮影)
地形の傾斜は写真の下側が高く、上側が低い方へ向かう。地山と造成土の境界が土色で判る。

写真図版6 E区航空写真(1)



E区北側(ほぼ垂直の上空から撮影)
写真下側の礎石は建4～6、上側は縁石列と石列1



E区南側(ほぼ垂直の上空から撮影)
写真中央の礎石列は建2・3。石列3・4と土6・7はまだ明瞭に現れていない。

写真図版7 E区航空写真(2)



E区南部全景(東から撮影)



E区中央部南全景(東から撮影)



E区中央部北全景(東から撮影)



E区北部全景(東から撮影)



E区建2(北西から撮影)



E区建3(北西から撮影)



E区 遺物出土状況



E区建4(南西から撮影)



E区建5(北西から撮影)



E区建6(北西から撮影)

写真図版8 E区全景・建物址



礎石 5 (建 4)



礎石 6 (建 4)



礎石 2 (建 4)



礎石 3 (建 4)



礎石 4 (建 4)



礎石 28 (建 2)



礎石 23 (建 3)



礎石 24 (建 3)



石列 4 (北東から撮影)



石列 1 (南東から撮影)



石列 5 (南東から撮影)



縁石列 (北東から撮影)

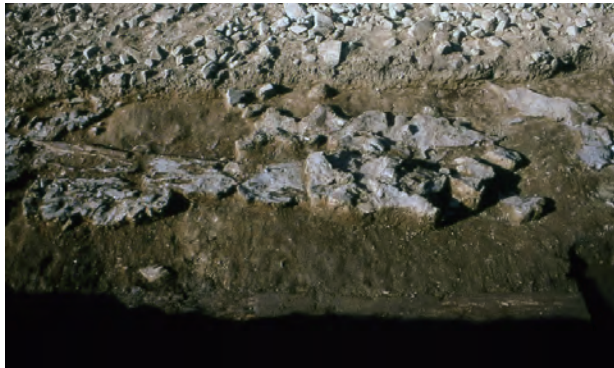
写真図版9 E区 礎石・石列



1工 全景(東側から撮影)



1工 掘下げ状況(下層の礫と一部底面屋根材)



1工 底面の屋根材出土状況



1工 底面の屋根材出土状況拡大



6工 掘下げ状況(北西から撮影)



6工 建築材出土状況
屋根の基部材、50cm 間隔で 10×2cm の切り込みがある



6工 建築材出土状況
屋根の基部材(上)と床付近の材(下)



6工 建築材出土状況
屋根材(アスファルトルーフィング)



3工 現況(樹木等清掃後)



3工 屋根材(アスファルトルーフィング)出土状況



5工 確認状況



7工 調査状況



7工 調査状況(建築材出土)



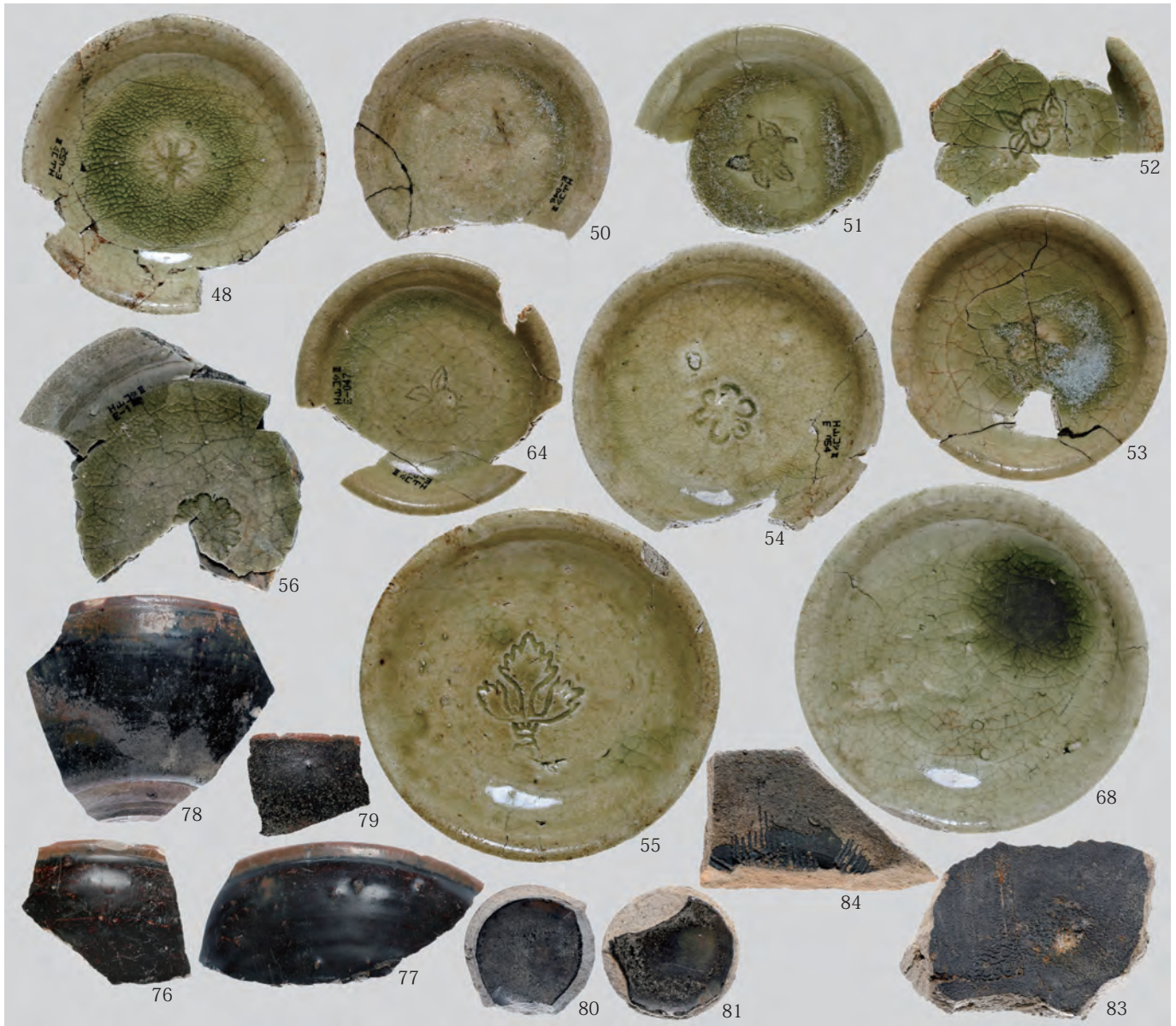
7工 建築材出土状況(柱と構造材)



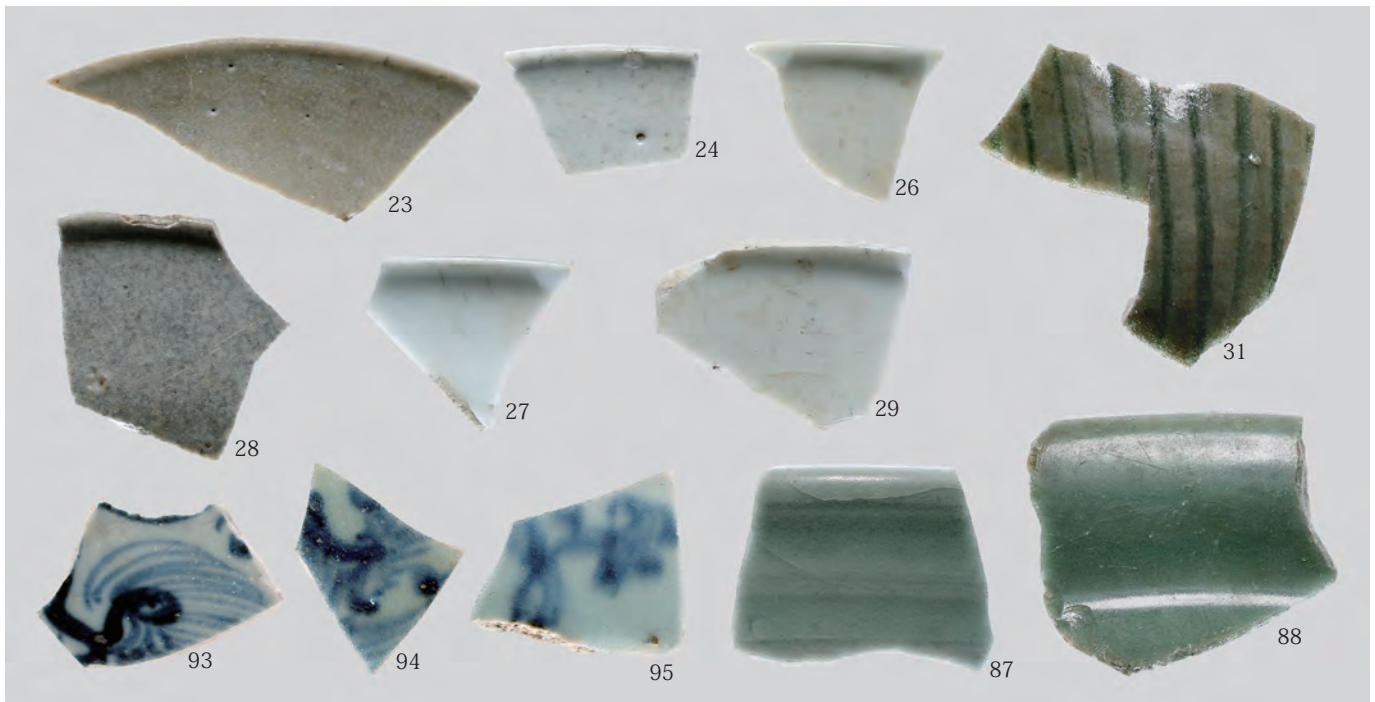
9工 現況(樹木等清掃後)



10工 現況(樹木等清掃後)



瀬戸産端反皿、天目茶碗、搗鉢（縮尺 1/2、番号は第 17 図、第 1 表と一致）



白磁・青磁・青花（縮尺 1/1、番号は第 17・18 図、第 1 表と一致）

写真図版 12 出土陶磁器

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし はやしやまこしいせき2 はくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 林山腰遺跡Ⅱ 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.174							
編著者名	小松芳郎、澤柳秀利、竹原 学、直井雅尚							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0874 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2004(平成16)年3月31日 (平成15年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
はやしやまこし 林山腰	ながのけんまつもとし 長野県松本市 さとやまべ 里山辺 5027-1ほか	20202	208	36度 13分 34秒	138度 0分 13秒	H14.5.23 ～ H15.2.15	2507.5 m ²	開発事業に 先立つ 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
林山腰	集落跡 ・ (近代遺構)	中世 ・ 近代	建物址	6棟	[土器・陶磁器] 土師質土器 中世陶器	・礎石を伴う中世の建物址群を調査した。土坑や石列等が付随しており、多数の土器・陶磁器が出土した。 ・第2次世界大戦中に造られた近代遺構(半地下工場跡)の分布や構造を確認した。		
			礎石	37基	青磁			
			土坑	7基	白磁			
			石列	5条	青花 [金属製品]			
			溝址	2条	銭貨			
			緑石列	1条	[近代遺物] 弾丸			
			近代遺構 (半地下工場跡)	12カ所	建築材 光学フィルター 電線 碍子 獣骨			
要約	<p>・林山腰遺跡の第2次調査で、県営中山間地域総合整備事業の工事に先立って遺構・遺物の存在や性格を把握するため確認調査の発掘を実施した。15世紀後半から16世紀初頭の土器・陶磁器類を伴う礎石建物や土坑、石列等が集中して確認され、同時期の遺構群が展開している状況が推測された。隣接する林大城、林小城などとの関連性が問題となろう。</p> <p>・近代遺構は第2次世界大戦中に建設工事が進められた、軍事工場の疎開による里山辺地区半地下工場のうち、対象区域内で計画された12基について所在と規模、構造等の確認を試みた。その結果、当時の建築材や遺物の出土があり、発掘調査による把握がなされた。</p>							

松本市文化財調査報告No.174

長野県松本市

林山腰遺跡Ⅱ

—発掘調査報告書—

発行日 平成16年3月25日

発行 松本市教育委員会

〒390-0874 松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社アサカワ印刷
